

東北文化研究室紀要通巻第63集別冊（2022年3月）

日本列島における先史時代の石器兵站戦略

鹿 又 喜 隆

日本列島における先史時代の石器兵站戦略

鹿 又 喜 隆

1. はじめに

兵站（ロジスティクス：logistics）の技術は人類の生存戦略の根幹であり、ホモサピエンスを特徴づける計画的行動の基盤である。歴史上の長距離遠征や戦争を例に見ても、高度に計画的な行動には戦略的な兵站技術が不可欠であった。本論で扱う「兵站」は、軍事的な意味合いを示すものではなく、平時の生活物資の確保と流通、時には祭祀行為に関わるものである。日本の歴史では、弥生時代の銅鐸の一括埋納遺構のような祭祀的なものや、沖縄諸島のイモガイ集積のような稀少品の保管・流通・交易に関わるものなどがあり、それぞれ重要な社会基盤を成していた。なかでも先史時代の石器の兵站遺構は「デポ（Dépôt）」や「キャッシュ（Cache）」と呼ばれ、国内外で注目されてきた。日本の考古学研究史上では、田中英司（2001）による集成が最も顕著な成果である。その掲載遺跡数は91箇所であったが、その後、約20年間に発見された資料は膨大であり、筆者による2020年までの全国集成によれば、旧石器時代から縄文時代までの兵站遺構は約600件（495遺跡）にのぼる（Tabarev, Ivanova and Kanomata 2021）。そして、グローバルな視座から見て日本の兵站遺構の検出数は突出しており、殆どが発掘調査による詳細な記録を伴うことから、その総括が期待される。すなわち、日本の事例は先史時代の兵站技術の通史を世界に先駆けて詳述できる程の蓄積を有している。また、兵站遺構「デポ」の定義は、佐原眞（1985）によって国内外の状況が詳細にまとめられて久しい。2000年以降、国際的には兵站技術の定義や研究意義が改めて議論されているため、兵站遺構をより厳密に抽出し、再集成・再検討を行う時期に来ている。

兵站技術は、道具（モノ）をめぐる技術組織（technological organization；Binford 1979）の中で、製作・使用・維持／消費・廃棄の技術と相互作用して技術戦略を構成し、社会・経済・思想・居住の戦略とも関係し合う（鹿又2017）。日本の考古学研究では、製作や使用といった技術要素に比べて、この兵站／補給に焦点を当てた研究が極めて少ない。しかも、兵站は物資の流通に関わるだけでなく埋納遺構を含むため、祭祀・儀礼などの思想的戦略にも関係し、当時の抽象観念を理解することにも繋がる。祭祀・儀礼の兵站遺構には、当時の最も重要な器物が含まれることがあり、最高水準の材料と製作技術、装飾技法が用いられるため、時代と文化の象徴と言える存在である。すなわち、日本先史時代の兵站技術の変遷を通時的に明らかにすることは、先史時代の社会進化・文化変動という核心的課題を例証することに繋がる。

さらに、本研究では日本列島の先史時代のキャッシュを集成するが、キャッシュは特に北米のクロービス文化（約1.3万年前）にも隆盛しており、共通の特徴である。近年、約1.5万年前の北米への太平洋岸ルートが指摘され、有舌尖頭器の分布範囲と遺跡立地の傾向から、日本列島を含

めた極東地域にファーストアメリカンの起源が求められる (Erlandson and Braje 2011)。人類の長距離移動に兵站技術の発展は不可欠であり、それを示すように日本、ロシア極東、北アメリカの約1.5~1.3万年前の遺跡には、石器の兵站遺構が多く認められる。すなわち、本研究は、旧大陸から新大陸への約1.5万年前の人類拡散の要因について兵站戦略が関係したという新たな解釈を提示できる可能性をもつ。

2. 研究の目的と方法

本研究では、日本列島の先史（旧石器・縄文）時代の石器キャッシュを集成し、その定義を再検討する。そして、各種キャッシュの出現と展開の歴史的意義を明らかにしたい。このような通時的な比較を行うことでキャッシュ戦略の変遷と発展を理解し、広域的に俯瞰することでキャッシュの地域性や各種石材の管理方法の特徴を明らかにする。具体的には、個々のキャッシュの時代・時期、所在（遺跡・遺構）、石材、石器組成を明確にし、行動戦略の中で評価することを意識して、分析をおこないたい。

さて、キャッシュの定義については、日本では佐原眞（1985）によるヨーロッパの「埋納（デポ）」の検討が最も詳細である。具体的な事例紹介のうえ、佐原はイギリス考古学では、チャイルドによるデポの説明を超えるものはないと述べている。その分類は、「家財の埋納」、「供献の埋納」、「商人の埋納」、「鋳物師の埋納」の4種である（Childe 1930）。また、ドイツ考古学で言う「単数遺物埋納」を認識することも重要であると述べているが、本論では発掘調査での認識に基づくため、概して単数埋納が含まれていない。なお、本論では、「デポ」でなく、「キャッシュ」という用語を一貫して使用している。そもそもキャッシュは、貴重な資源間の時間的（例えば季節的）・空間的（例えばパッチ状）な不一致を改善するのに役立つものである（Binford 1980）。つまり、ある資源や道具をキャッシュすることによって、その時空間的な不均衡をなくすロジスティックな戦略である。そして、キャッシュは、墓の副葬品の集積とは異なる性格のものである。さらに、祭祀行為の場合には、特殊な遺構や遺物が伴えば祭祀埋納であると判断できるが（例えば、後に概説する安俵6区遺跡の石鏃集積や、トロトロ石器集中による霊峰への山岳信仰など）、多くの場合は明確に区別することが難しい。したがって、本論では、祭祀的な埋納も結果的にキャッシュに含まれる。弥生時代以降になると、銅鐸・銅矛・銅剣、ノミ状鉄製品、玉類、土器（土師器・かわらけ・陶磁器）、銭などの多数一括埋納が顕在化し、それ以前のキャッシュとは異なる特徴をもち、祭祀遺構であることが明らかである。しかし、先史時代の場合には、日用品と祭祀具が同一物であり、厳密な区別が困難な場合が多いため、本論では一括して集成し、最終的に他のキャッシュと対比することで、その機能・役割を推察したい。

近年の欧米の研究事例を参照すると、石器に関わる兵站戦略は、① 保険 (insurance)、② 受動的 (passive)、③ 積荷交換 (load-exchange)、④ 余生 (afterlife) の4つのタイプに分けることがえきる (Kilby 2008, Hurst 2017)。① は、想定内外の様々な仕事に使われる道具で構成

され、断続的に居住される場所に設置される。例えば、回帰的居住地に残される一時的貯蔵施設が一例としてあげられる。②は、時空間的に予測できる特定の資源の加工のためにデザインされた特定の道具で構成され、ある季節のみに使われ、その他の季節は保管される。③は狩猟採集民が新たな資源を獲得したが、余分な荷物を持ち運ぶことができない時に作られる。例えば、余分な剥片石器が埋置されるが、再びその地に戻るかは分からない。④は、その後使用されることがないまま束ねられるか、景観の中の特定の儀礼的な場所に奉納品として残される。以上のように、兵站を認定する条件として、保管や埋納のための施設（穴や容器など）に収納あるいは隠匿されていることがあげられる。したがって、石器を使用した後に残された特定器種のまとまりや、石器製作後に残された剥片・碎片・石核の集中はキャッシュに該当しない。なお、上記の分類は、欧米の事例に基づくものであり、本論では日本列島の先史時代のキャッシュの集成から、適切な分類を検討する。特に考古資料の現実から分類基準を設定することが望ましい。

兵站に関わる石核リダクションの効率性に関しては、実験研究に基づく考察が試みられている (Jennings et al. 2010)。北米パレオインディアン文化のクロービスとフォルサムの両グループでは、コアリダクションの選択と、輸送コストの最小化の意識が異なっていた可能性が指摘される。現状では、実験数の不足や熟練者による石器製作の実践が不足しており、不十分な点があるものの、より厳密に石器の技術と運搬、兵站の関係を検討する上では参考になる研究の方向性である。さらに、行動の計画性を考える場合に、Planning depth（計画の深度：予想されるニーズが認識された瞬間から、それらのニーズを満たすために行動が採られる瞬間までの時間）や、Tactical depth（戦術の深度：地域の環境的・無意識的・立地的な機会に関する蓄積された知識に基づいて、予想されるニーズを満たす能力）との関係での議論がみられる (Peresani 2009)。Peresani が指摘するように、埋葬品や副葬品は将来の探索や使用のために保存されたものではないため、キャッシュとはみなされないと考えられる。キャッシュとは、危機的な状況での時間的ストレスを軽減することを目的とした、ロジスティック志向（またはコレクター志向）の狩猟採集民グループにおける重要な戦略である。したがって、キャッシュとは予測的行動の証拠と解釈され、居住／生業システムの戦略的枠組み内での戦術的な計画と運用にある程度の深度をもつことを示す (Binford 1979)。本論でも、これらの論にならって、キャッシュに副葬品を含めない。

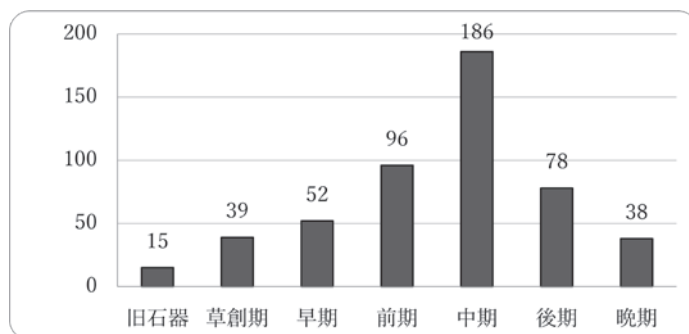


図1 時期別のキャッシュ件数

3. 時期別の集成結果

(1) 後期旧石器時代のキャッシュ

日本列島の先史キャッシュのなかで細別時期を特定可能な504件を集成した(図1、表1)。うち後期旧石器時代のキャッシュは15件認められ、ほとんどが原石・石核の集積であった(図2・3)。特に黒曜石原石や石核の集積が多く、信州産黒曜石の原産地付近では前半期の広原遺跡(小野他編2016)や、後半期の鷹山I-M地点(戸沢他1989)や割橋第VIII(三木他1998)、追分(大竹他2001)、男女倉J地点(森嶋・川上1975)等の諸遺跡で確認され、縄文時代まで断続的にみとめられる。しかし、例えば広原遺跡の事例では石器の接合が多く確認され、原石の持ち込みから石器製作、廃棄までの一連の活動がなされた場と評価されており、厳密にはキャッシュとみなされない。また、神奈川県の下森鹿島遺跡(迫他1999)や静岡県の観音洞B遺跡(杉本他1994、図3-5)でも黒曜石原石の集積が確認される。特に後者では、土坑の底面に埋納されており、隠匿や貯蔵を意図した可能性が高い。表採ながら、長崎県根引池遺跡では黒曜石原石5点の集積が確認された(山口2015)。他の石材をみると、岡山県の恩原1遺跡では水晶(稲田編2009、図2-1)、神奈川県の下森鹿島遺跡ではチャート(下森鹿島遺跡発掘調査団1993、図2-2)、山形県のお仲間林遺跡では珪質頁岩(佐藤・黒坂1995、図2-3)、長野県の西岡A遺跡では無斑品質安山岩(土屋・大竹2000、図3-1)の石材の集積が確認される。いずれも原石や工程初期の石核で占められるが、製作遺跡であることから、原石の搬入を示すだけであり、ロジスティックな計画的運用を意図した施設とは認め難い。その他に、土坑を伴う石核や剥片・碎片の集中は、宮城県の富沢遺跡(太田・斎野他1992、図3-3)、山形県の上ミ野A遺跡(傳田他2004)や高倉山遺跡(鹿又・佐野編2015)などの遺跡で確認される。いずれも石器製作に伴う残滓が中心であり、窪みや穴の上での石器製作や片付け、廃棄行為と関連する可能性が高い。富沢遺跡を除き、原石や初期段階の石核を含まないことから、厳密な意味で兵站遺構とは認定できない。その他にも、先行研究(田中2001)にてデポと評価されたツールの集中箇所があるが、例えば製作物である剥片・碎片と重複したり、多くの接合関係がみられる場合には、本論では製作址と判断した(丘の公園第1、東野、はけうえ、上白滝8、服部台2)。さらに、北海道の旧白滝5遺跡は一見石器集積に見えるが、実は製作址であるうえ斜面地に二次堆積した集中である可能性がある(直江2008)。その他に、旧石器時代にも集石遺構(礫群)があり、それと区別する必要がある。神奈川県の下森鹿島遺跡では磨石の集積があるが(堤編1998)、集石との区別が難しい。なぜなら、磨石や台石は礫群の一部として再利用される可能性があるためである。さらに、長野県の日向林B(土屋・谷2000、図3-4)や貫ノ木(土屋・大竹前掲)、東京都の鈴木遺跡B地点(鈴木遺跡調査団1975)、埼玉県の末野遺跡C区(西井他1999)、鹿児島県仁田尾遺跡(宮田他2008)のように、局部磨製石斧や礫器、砥石のような大型品が集中して利用された場所では、あたかも意図的に集めたように見える。しかし、石器の配置に一定の方向性・規則性が認められないので、キャッシュとは認定しなかった。大きな石刃や石刃素材のツールが集中する山形県高倉山(鹿

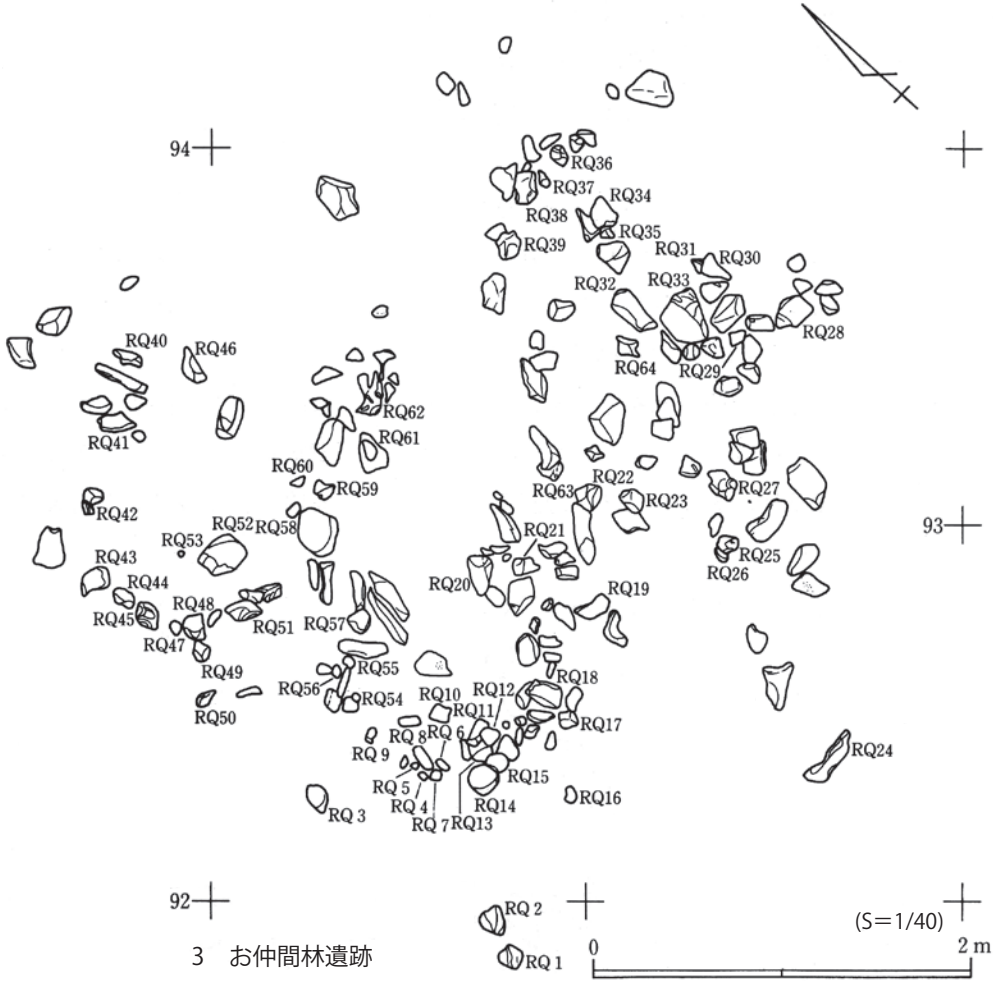
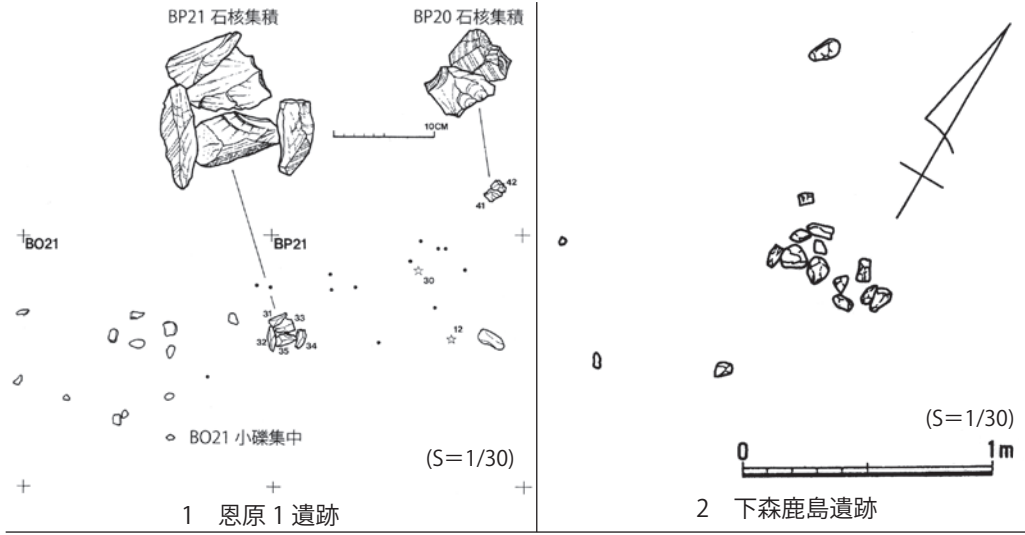


図2 後期旧石器時代のキャッシュ

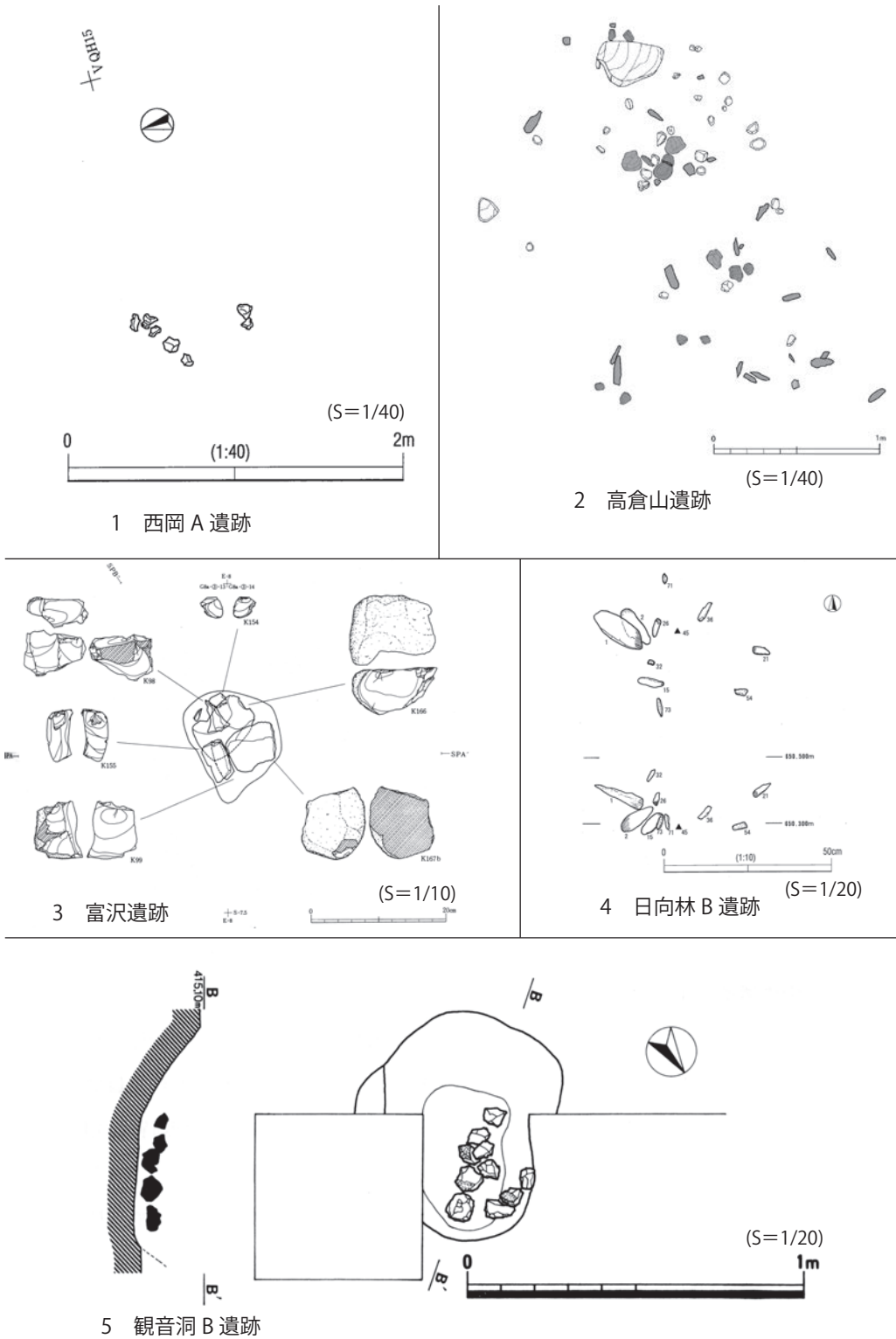


図3 後期旧石器時代のキャッシュと石器集中

又・佐野編前掲、図3-2)や、先行研究(田中2001)にてデポと評価された打越、御山遺跡の場合でも、同様である。こうした大型品の集中は、縄文時代のキャッシュの密度や定方向性と比べると、違いが明確になる。極めて稀な事例であるが、岩戸遺跡では、大型の礫の下に石核1点を隠置したとされる(芹沢編1978)。単数遺物埋納を認識できた貴重な調査例である。

以上のように、後期旧石器時代のキャッシュの多くは黒曜石等の原石・石核の集積であり、長野・神奈川・静岡県域に多く確認される。後に述べる縄文時代と比べれば、兵站戦略が低調であり、基本的には原石を自給的に獲得するフォレイジャー型の行動戦略が一般的であったと考えられる。石材・原石のキャッシュは互酬的な交換や一方的な譲与を通して石材流通戦略の起点となっていたと考えられる。後期旧石器時代の後半期からみとめられ、石材が広域的に運搬・移動される時期に顕在化している。

(2) 縄文時代草創期のキャッシュ

縄文時代草創期には39件のキャッシュが確認される。神子柴・長者久保石器群とその後の縄文時代草創期前半には大型の尖頭器や局部磨製石斧が集中することが多く、かねてよりデポ、キャッシュに関する議論が盛んであった。長野県の宮ノ入(森嶋1968)や小鍛冶原(下村他2009)、秋田県の綴子(八幡1938)、岩手県の持川(鈴木1969)、福井県の鳴鹿山鹿遺跡(松井1980)など、発掘調査によらない確認事例も多いが、大型で優美な完成品がまとまって出土することが知られている。また、青森県の槻ノ木、福島県の大坂、下ノ平D、天光、南諏訪原遺跡は、神子柴石器群と一時評価されたこともあったが、後に別時期に属すると見直されている。筆者は、神子柴期の大型の石器が、3~5m程の環状に分布する傾向を指摘したことがある。大型品が一定の範囲に集まるのには理由があるが、それをテント状施設内の周縁に配置された道具の位置を反映していると推定した(鹿又2008)。堅穴住居跡のような明確な遺構が確認されないものの、道具の所有と管理を考える上で必要な観点である。その中には、大型の尖頭器や石斧が集積して出土する場所がある。長野県の神子柴遺跡が代表的であり、各種の石器がそれぞれにまとまっている(林・上伊那考古学会編2008、図4-1)。2点の石斧が並置された事例は長野県の七ツ栗遺跡(中村・立木2008、図4-2)や山形県の日向洞窟(佐川・鈴木編2006)などで確認されている。

こうした神子柴石器群に多い石器分布に対して、より典型的なキャッシュが草創期後半に認められる。それは、石器製作に関わる石核や剥片と、一部のツールを一ヶ所に集積した遺構である。主に東北地方の珪質頁岩を素材とする地域に見受けられる。1か所に収められる石器の数が急激に増えて百点以上にのぼることもあり、キャッシュの性格に大きな変化が生じたことが窺える。ちょうど堅穴住居が現れた時期であり、定住性に関わる戦略的变化であったと考えられる。宮城県野川の遺跡の事例をみると、ツールや剥片が背面や腹面を互いに接するような状態で重なり、集積の周縁部では石器が直立している(工藤他1996、鹿又2018、図4-4)。こうした出土状況は袋に入れられて、土坑内に収納されたことを示している。こうしたキャッシュは基本的に堅穴住居跡の外側から見つかっており、集落内で共有される道具や素材剥片の集積施設として評

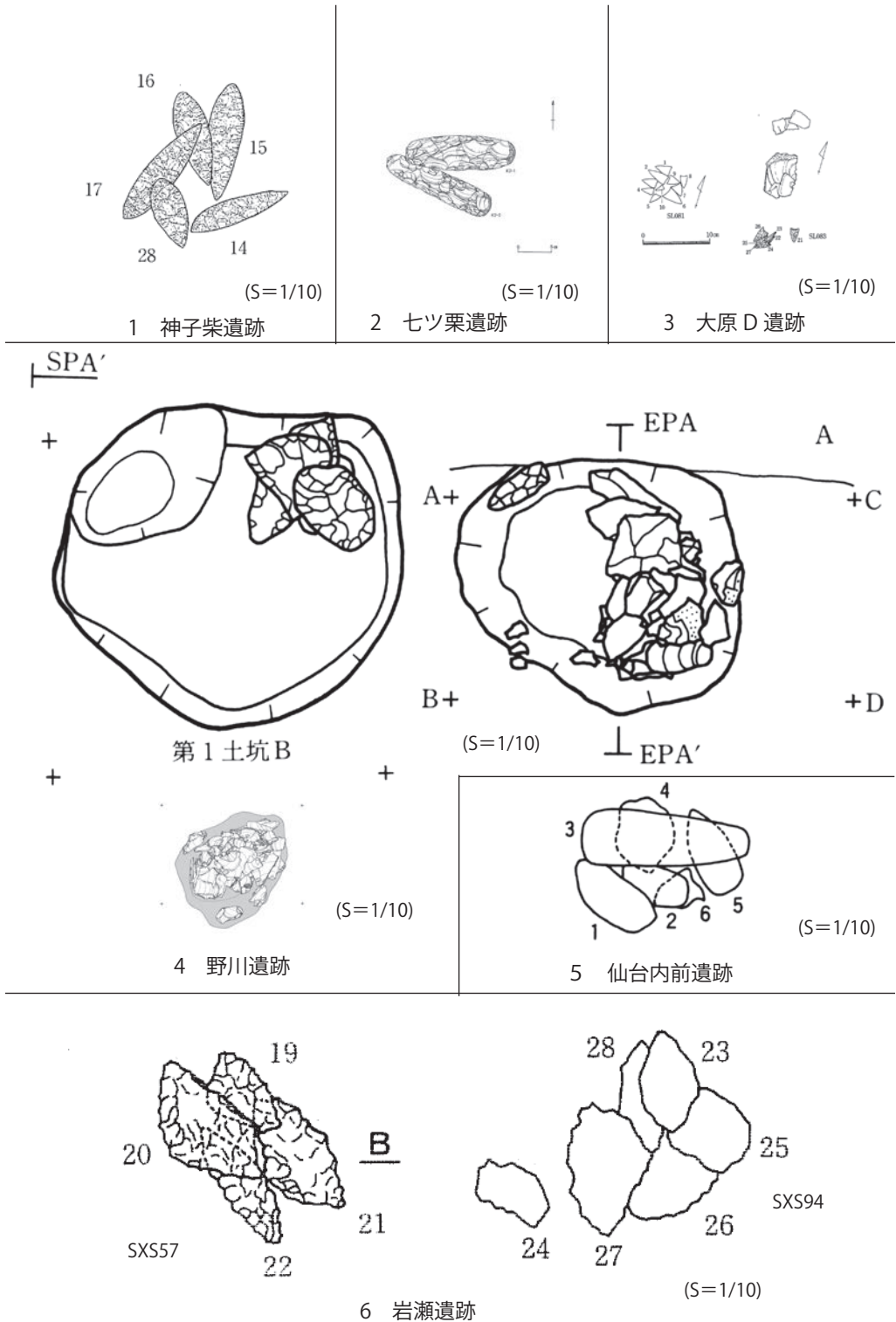


図4 縄文時代草創期のキャッシュ

価できるものであろう。確実に住居内キャッシュと評価できるのは福岡県の大原D遺跡の石鏃集積や剥片集積のみであり（池田他2003、図4-3）、草創期においては例外的と言える。住居内での石鏃の製作跡が認められることから、完成品や素材剥片を一ヶ所に集めた事例と言える。

また、大型剥片の集積は神奈川県の見野上野第2地点（戸田・相原1984）や宮城県の大森山遺跡（工藤他前掲）で見つかっている。その他に、各種のツールのみを集めた遺構が、福島県の仙台内前遺跡A地点（武田他1988、図4-5）、日向洞窟西地区に認められる。秋田県の岩瀬遺跡では両面調整の石核だけの集積が確認され（利部・谷地1996、図4-6）、原産地での石核ブランクの生産と管理の特徴を示す。まれに礫で覆われたものもある。神奈川県吉岡遺跡群D地区4ブロックでは、ホルンフェルス製の石斧1点、礫器2点、打製石斧1点が大きな蓋石の下から出土した（白石・笠井1999）。これらは道具の隠遁保管の事例であり、作業を一時中断した後の再利用が想定される。

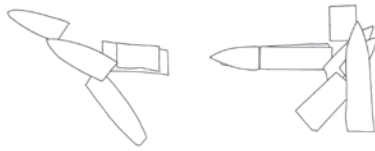
以上のように、縄文時代草創期になると旧石器時代よりもキャッシュの数が多くなる。キャッシュの内容も多様化するが、堅穴住居内での兵站は基本的に認められない。多くは堅穴住居跡に隣接する場所で見つかるため、集落内・家族間で共有されるような石器や石器素材の管理であったと考えられる。さらに隠匿を示唆する遺構も散見され、遺跡・遺構の回帰的利用、断続的利用が想定される。また、キャッシュ内の石器組成は異なり、それぞれのキャッシュが何らかの機能と結びついていたことを示している。このように縄文草創期のキャッシュはコレクター型の行動戦略の始まりであったと評価できる。

(3) 縄文時代早期・前期のキャッシュ

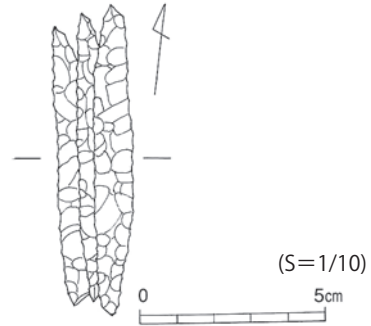
早期になると、草創期よりもキャッシュの数はやや多くなり（52件）、前期になるとさらに増える（96件）。その内容に大きな変化はないが、石斧と異形石器の集積の割合が増え、狩猟具のキャッシュが減る傾向にある。

北日本以外の地域のキャッシュは、ほとんどが黒曜石の原石・石核か、石斧である。例外的な事例であるが、鹿児島県の園田遺跡は3か所から完成品の尖頭器9点（最長約30 cm）と磨石1点が見つかっている（田平・野平2004、図5-1）。また、同県の吹上小中原遺跡では石槍3点と同軸で並置されている（中村他2005、図5-2）。長さ16 cm前後の細身で、サイズ・形態が共通したものであり、結縛されていたものかもしれない。宮崎県の五反畑遺跡ではスクレイパー2点と二次加工ある剥片4点が集積されている（今村2010、図5-3）。南九州では、このようなツールの集積遺構が早期には確認されるが、前期になると見られなくなる。

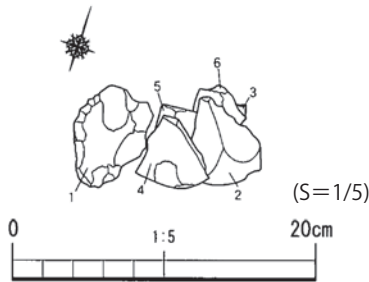
大集落である鹿児島県の上野原遺跡では、石斧を同軸で並置して納めたものが確認される（中村他2001、図5-8）。環状遺物集中の中央の空白域に石斧が埋納されている。そのため、何らかの祭祀行為に関わるものであった可能性が示唆されている。筆者は石斧の位置が集落の共有物であることを単に示すにすぎないと推測する。長野県の山の神遺跡でも同様な遺構が確認されるが、トロトロ石器（局部磨製異形石器）が集中する遺構もある（川崎2003、図5-5）。類例とし



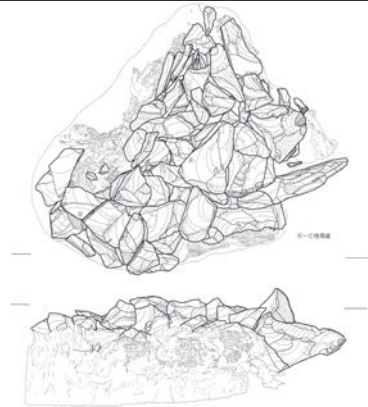
1 園田遺跡



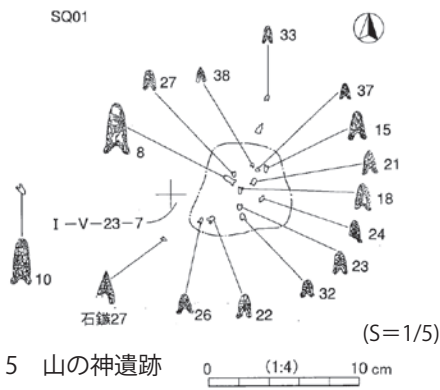
2 吹上小中原遺跡



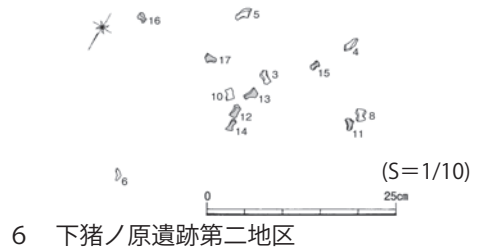
3 五反畑遺跡



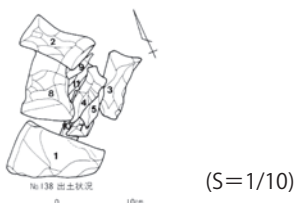
4 横尾貝塚



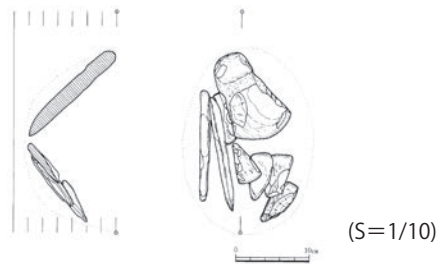
5 山の神遺跡



6 下猪ノ原遺跡第二地区



7 松原遺跡



8 上野原遺跡

図5 縄文時代早期のキャッシュ

て、岐阜県の前平山稜遺跡のトロトロ石器集中があげられる（石原他1993）。トロトロ石器は東西南北を向くように配置されているという。石器形態は異なるが、異形石器（挟入石器）16点の集中が宮崎県の下猪ノ原遺跡で検出されており、類似の遺跡の機能と推測される（秋成2011、図5-6）。トロトロ石器や異形石器の集中は山岳信仰（山の神信仰）と関係すると考えられ、隣接して石列や配石遺構があり、さらに現在でも山の神信仰が残る土地である点も興味深い。宮崎県の上猪ノ原遺跡では、石斧2点が同軸で重なり、1点が立っているのが確認された（井田他2008）。鹿児島県や宮崎県では、早期から前期にかけて石斧の集積遺構が多い。石斧を立て並べて埋置する仕様は、鹿児島県の南田代遺跡でも見られる（彌榮他2005、図6-1）。この遺跡では、磨石の集積や、安山岩製剥片類の集積、針尾産の黒曜石原石の集積などもあり、各種の集積遺構が併存している。上野原と同様の拠点集落と評価できる。

早期後葉から前期初頭にかけての事例であるが、石材運搬を窺える貴重な遺構が、大分県の横尾貝塚で発見された（塩地他2008、図6-4）。水場遺構の中の編籠・バスケットに、姫島産黒曜石の原石や剥片69点以上が収められていた。当時の石器素材の運搬、保管方法を推測できる事例である。同遺跡では、重さ10kgを超す黒曜石原石が2点並んで見ついている。また、姫島産黒曜石の原石を収めた遺構が同県の羽田遺跡から5か所確認されており、当該期の黒曜石の流通と管理との関係が窺える（宮内1988）。遺跡の立地から、海上輸送直後の兵站基地と言える。このように黒曜石原石・石核のキャッシュは前期に急増し、縄文時代の中で最も多くなる。特に長野県において、黒曜石原石のキャッシュが早期には目立たなかったものの、前期になると急増している。例えば、前期前半の阿久遺跡（小柳他1985）や高風呂遺跡（守屋1986）、舅屋敷遺跡（小林・鳥羽他1982）等では住居内の床面から黒曜石原石集積が見ついている（図6-2・3）。一方、前期前半の駒形遺跡（贅田・小林2007）、坂平遺跡（小林他2004）では、住居外から黒曜石原石の集積が確認される。多くの遺跡が、原石を獲得し、石器製作を行う場所であったと考えられる。こうした長野地域の黒曜石の採掘や流通については、多くの研究者が検討している（長崎1984等）。当該期の珪質頁岩原産地付近の様子は、山形県の富山遺跡が示している（鈴木他1998）。遺跡内の尖頭器や石筥の形態から早期と判断したが、直径5m程の範囲に径15~20cm程の頁岩円礫188点以上が集められている。遺跡内では膨大な石器資料があり、製作址の様相を示す。

剥片の集積や、ツールのキャッシュも早期から前期にかけて同様に見られる。北海道の山崎4（谷島他2001、図6-6）と青森県の長七谷地（八戸市教委1982）、岩手県の吉田館（千葉2008）、上八木田1（千葉1995）、秋田県の上谷地（大野他1994）、宮城県の小梁川（村田他1987）などの遺跡では剥片キャッシュが検出されたが、北日本の遺跡ばかりであり、明らかな地域差がみられる。ツールのキャッシュは前期・中期に見られ、秋田県の烏野上岱では多様な器種を平面的に屋外に並べ置いた状態である（新海他2006、前期初頭~前葉）。また、山形県の押出（佐藤1990、図6-4）や岩手県の宝性寺（丸山他2004、前期末~中期）、北海道のピラオツマッコウマナイチャシ遺跡（小林1985、中期）では住居内にみられることから、日常的な道具箱として石器を並置して利用したと思われる。山形県の松原遺跡では石筥（トランシェ様石器）が集積され

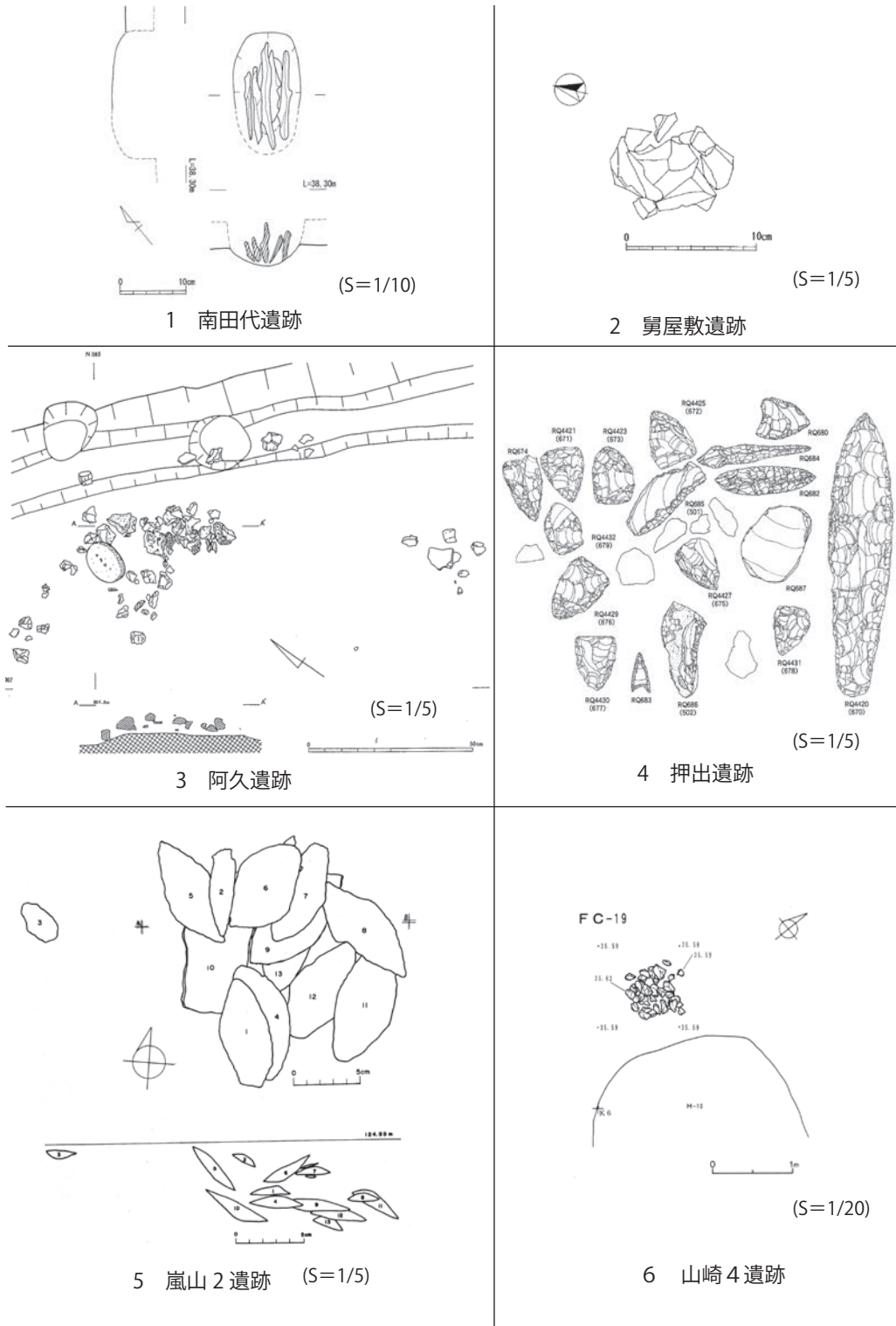


図6 縄文時代前期のキャッシュ

ており、その機能は皮なめしと推定される（安部・渋谷1991、図5-7）。八反遺跡は伴出土器がなく時期不明ながら、石器の形態から早期から前期に属すると推定される（高桑2019）。エンドスクレイパーが中心であり、皮革加工を行うための屋外施設と評価できる。青森県の鷹架遺跡は、長さ15 cm前後の大型石匙2点が完全に重なった状態で出土している（遠藤他1981）。使用痕があるものの、標準的な石匙の2倍もの大きさであり、住居域から離れて位置するため、儀礼のような特異な行為を反映している可能性がある。北海道の嵐山2遺跡では両面加工の石槍10点や石匙1点、スクレイパー1点が径15 cm程の範囲に集積されている（西田他1987、図6-5）。石材はすべて白滝産黒曜石であり、袋詰めの状態を想定できる。原産地から約80kmの距離ながら、遺跡内にはまとまった量（全資料の8割）の同石材が搬入されている。日の出遺跡も尖頭器50点と磨製石斧8点が集積しており、類似の性格をもったものだろう（大場・菅1977）。

なお、早期以降、石錘の集積が各地の遺跡で確認される。石錘は綱紐で結ばれて使用されるため、使用後も集積状態で保管される可能性が高い。そのような管理体制のため、遺棄されたものが一括出土することが予想される。したがって、本論の石器キャッシュとは性格が異なるため、石錘の集積を集成に含めていない。

（4）縄文時代中期のキャッシュ

縄文時代中期は、キャッシュの数が最も多い時期である（186件）。その要因は、剥片キャッシュの急増であり、こうしたキャッシュの多くは竪穴住居内に設置される。住居内の剥片キャッシュは、草創期に現れるが、前期まで例外的（計7件）だったものが、中期になると95件と急増する。そのうちの90件が後葉から末葉（中期末葉から後期初頭を含む）にかけてである。多くは東北地方の事例であり、珪質頁岩の兵站を戦略的に行い、しかも住居単位・家族限定の利用だった可能性がある。さらに、こうした剥片生産では両極剥離や不規則的剥離が多く用いられるが、稀に石刃技法が用いられた点も特質のひとつである。北海道の山崎4（谷島他前掲）、山形県の高瀬山（今他2012）、福島県の弓手原A遺跡（山内他1996）等で石刃技法がみられ、原産地と消費地の様相を示している。弓手原Aの事例は、石刃を袋に詰めて運搬し、そのまま土坑に入れたような出土状況を示している（図7-2）。一方で、頁岩産地に近い高瀬山では総数1,204点に対して、石刃や稜付石刃の数は45点にとどまり、石刃の生産率の低さが窺える。したがって、良好な形態の剥片（石刃・縦長剥片）を選択して搬出する行動がとられていたと推測される。おそらく東北地方の季節性（冬季の積雪による石材獲得の不可能性と室内での石器製作・使用）に起因すると考えられる。この頃の東北地方中南部では、複式炉が増加し、住居構造が明確化する。また、遺跡数・住居数も増加することが示されているため、こうした兵站戦略の変化は、社会構造の変化と人口増加に伴う資源利用戦略の適応的変容の一端であると予想される。同様に集落共同体の中での石器資源の共用の問題や、資源分配の問題、石器資源の保有量の格差など、様々な検討課題を内包している。

中期では珍しい事例として、関東地方を中心に土器内保管が見られる。東京都の武蔵台（都立

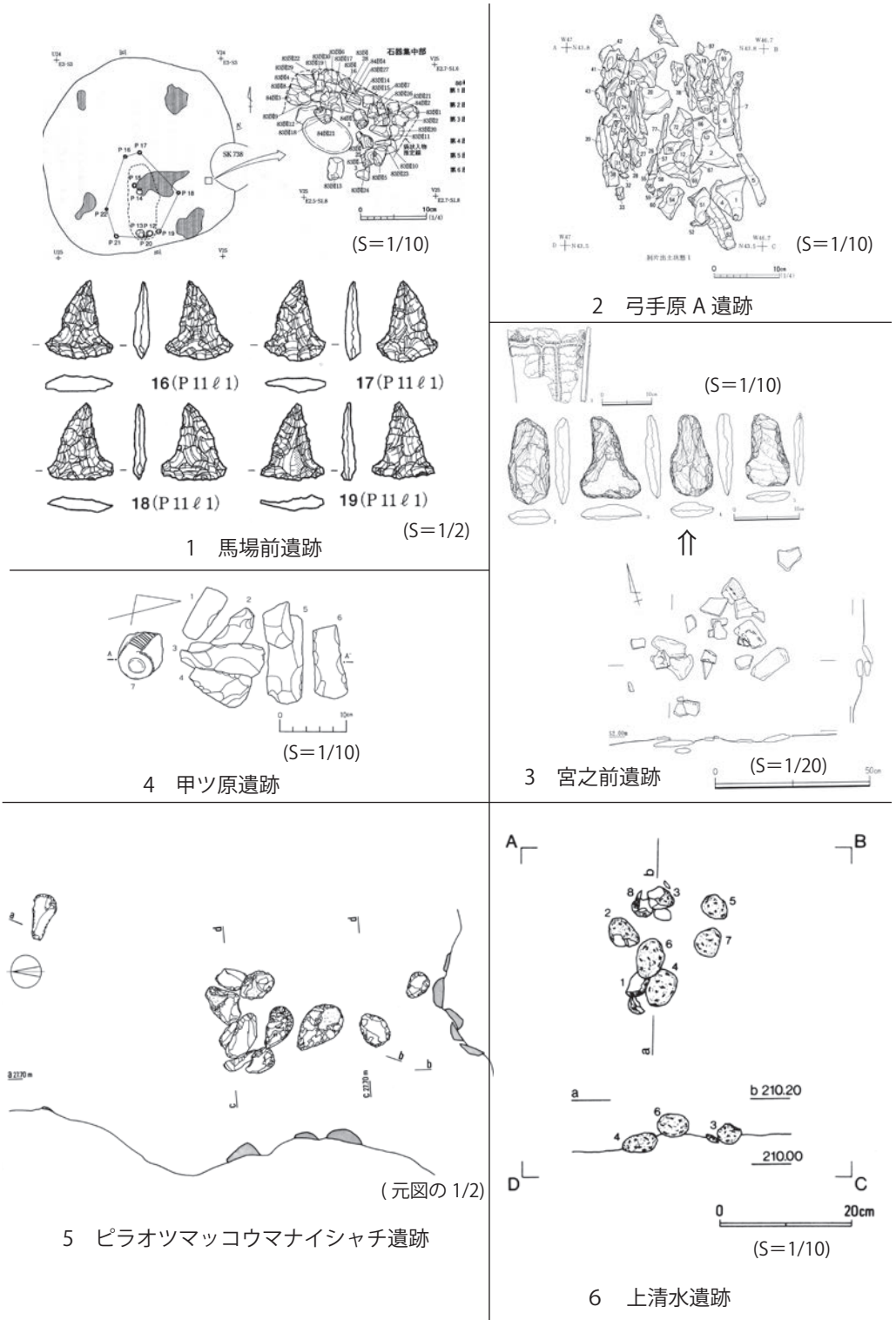


図7 縄文時代中期のキャッシュ

府中病院遺跡調査会1996) や埼玉県の塚越向山(合角 ダム水没地域総合調査会1995)、安庭遺跡(百瀬1975)がその事例である。また、土器自体は破損しているが、神奈川県の宮之前遺跡の石斧4点の上に破損した1個体の阿玉台式深鉢の事例も類例と思われる(伊丹他1999、図7-3)。特殊な形態の土器や遠隔地の土器が用いられており、運搬や交易の実態を検討できる資料である。なお、土器内保管が前期までには見られないため、物資の新しい保管法と言える。石斧の集積は東京都の栗山(吉田他1975)や山梨県の甲ッ原(山本・今福1992、図7-4)など北陸から関東・中部地方の遺跡に多くみられる。屋外に石斧の集積遺構が設けられることが一般的である。青森県の槻ノ木遺跡では、20点の打製石斧が同軸で集積された状態で見ついている(一町田・畠山1983)。石斧は斜めに立ち上がった状態であり、土坑に納められていた可能性が高い。福島県の馬場前遺跡では、異形石器4点が住居内のピットから一括で出土している(山内他2003、図7-1)。近隣の井出上ノ原遺跡でも12点が一括出土している(宇佐美2005)。異形石器の機能を解明する必要があるが、サメの歯形の形態であり、民族事例のサメの歯をはめ込んだ短剣のように組み合わせ式の道具であった可能性もある。北海道のピラオツマッコウマナイシャチ遺跡ではエンドスクレイパー12点が集積し、特定の機能(皮革加工)の道具箱であったことを示している(小林1985、図7-5)。野田生2遺跡では、玄武岩製の両面調整石器3点と頁岩製の石槍1点、スクレイパー2点、二次加工ある剥片6点、使用痕ある剥片2点、剥片82点が出土し、道具一式が含まれている(中田他2002)。

この時期には、北海道の上清水遺跡において、黒曜石原石の集積が確認されている(越田他1991、図7-6)。また、長野県内では尖石(宮坂1957)や長峯(柳澤他2005)、大石(半他1976)等の多くの遺跡で黒曜石原石が住居内に集積されて見つかり、石器原石を住居内に保管していたと考えられる。

以上のように中期はキャッシュの質と量において最盛期と言える。大集落の増加に伴い1遺跡内に多くのキャッシュが見られる事例が増加している。一方で、後述のように後期にキャッシュが急減しており、大きな画期となっている。縄文時代を通じてキャッシュの数は中期末にピークとなったが、理論的な枠組みに基づけば、縄文時代中期末はコレクター志向が最も高まった時代と評価される。

(5) 縄文時代後晩期のキャッシュ

後期のキャッシュは計78件となり、大きく減少する。前期よりもさらに少ない点が注目される。特に中期に増加した住居内の剥片キャッシュは、青森県の安田(2)遺跡の第26号住居跡内などにみられるが(畠山2001、図8-1)、後期前葉以降は少なくなる。このような剥片キャッシュの急減を除けば、キャッシュに内容の変化は小さい。キャッシュの構成物としては石斧が最も多く、次いで原石・石核、ツールが続き、狩猟具はほとんどない。例外的に、岩手県の安俣6区では、石鏃6点と剥片1点が先端を内側に向けて円形に配置されている(瀬川他2000、図8-3)。環状列石が発見された地点であり、祭祀の意味合いがあったと推定される。北海道の西昭和2遺跡で

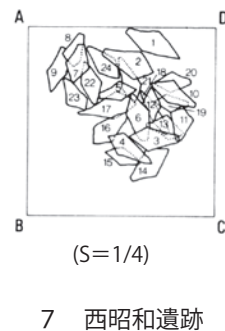
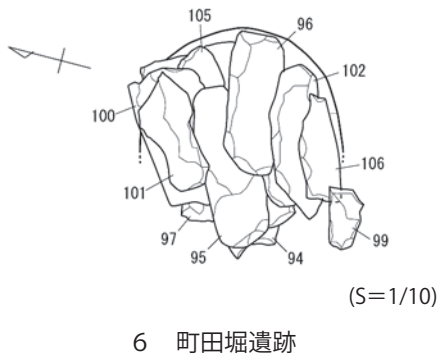
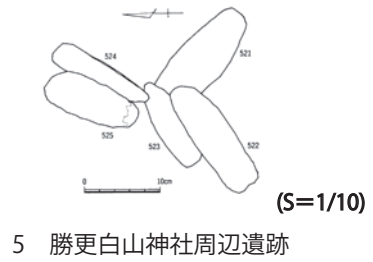
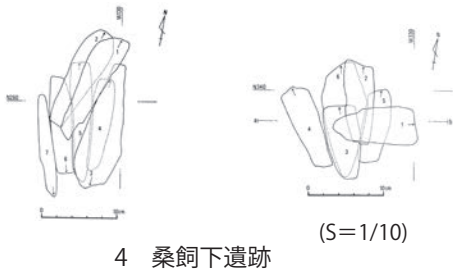
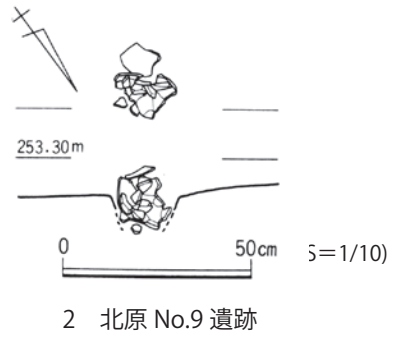
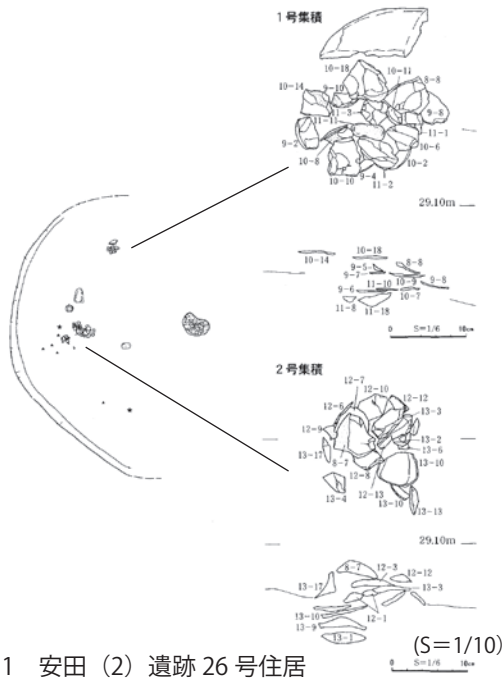


図8 縄文時代後期のキャッシュ

は、径20 cmの範囲から石槍108点と剥片2点が集積されていた（西田他1993、図8-7）。石材は十勝三俣産の黒曜石であり、袋入りの状態で持ち込まれたようである。神奈川県宮ヶ瀬遺跡群北原No.9遺跡では、土器内に黒曜石原石・石核17点が収納されていた（市川他1994、図8-2）。同遺跡では、石鏃未成品・欠損品32点と剥片・碎片多数を含む集積も確認されている。

石斧の集積は、静岡県富士石（勝又他2012）や鹿児島県の川久保（山形・中村2019）、京都府の桑飼下（渡辺編1975、図8-4）、岐阜県の勝更白山神社周辺（長屋1995、図8-5）などの遺跡で見つかっている。長崎県宮下貝塚では貝層中の土坑に石斧10点が埋納され、その上に人頭大の平石が載せられていた（川道他1998）。隠匿の一例である。鹿児島県の町田堀遺跡では、石斧集積遺構が2か所確認されたが（中村他2016、図8-6）、それ以外に礫や石皿、磨石、打製石斧、敲石で構成される集積遺構も確認されており、道具を集めて保管する行為が広く行われていた可能性がある。

晩期になるとキャッシュの数は38件と縄文時代の中で最も少なくなる。キャッシュの構成は後期と変化がない。剥片のキャッシュは東北地方の事例が僅かになるが、西日本で比較的多く見られるようになる。大阪府のミヤケ北遺跡では、石器製作の内容を示すサヌカイト製石器が土坑から一括出土している（山田他2012）。岡山県の百間川沢田遺跡では、点数は少ないながら、石核、大型剥片を含むサヌカイト製石器の集積が2か所確認された（平井他1993）。さらに、晩期後半から弥生時代にかけての大阪府長原遺跡（植木他1983、図9-3）や奈良県玉手遺跡（木許他2017）の事例などもあり、弥生時代に向けてサヌカイト剥片・石核の集積が目立つようになる。弥生時代になると近畿から瀬戸内地方にかけて同様の遺構が増加する。

後期・晩期のキャッシュの構成品として最も多いのが、石斧である。熊本県飛田遺跡群（村崎2015）や香川県平池南（蔵本1996）、鹿児島県市ノ原（繁昌他2006、図9-2）、柿木段（彌栄他2010、図9-4）、上野原遺跡（中村・池畑2003）で確認され、西日本にほぼ限られる。

剥片や原石・石核のキャッシュが住居内にみられるのに対して、石斧のキャッシュは決まって住居外に位置する。祭祀遺構の可能性もあるが、石斧の所有・利用が個人や家族単位ではなく、一貫して集落単位であったことを示唆する特徴である。石斧の未製品が多い点も、祭祀ではなく、ブランクの保管・兵站であることを含意する。晩期には住居内キャッシュの確実な事例が無い。

晩期になると北日本では、土器内キャッシュがみられる。白滝産黒曜石製大型剥片5点を壺に納めた北海道の栄町5遺跡（長沼他1990）、磨製石斧10点を鉢に納めた秋田県の秋大農場南遺跡（菅原・安田1992）があげられる。原石キャッシュでは、白滝赤石山産の棒状黒曜石2本が北海道のオリカ2遺跡から出土した（佐川他2003）。長さ30 cmを超える超大型品であり、同軸で並んでいる。また、東山5遺跡では、石鏃43点の集積や、石鏃11点の集積、スクレイパー・石鏃・剥片など20点以上の集積が見つかっている（西田・浦辻1982、図9-5）。いずれも径15~20 cmの狭い範囲にまとまる。ママチ遺跡でも土坑上の剥片・碎片38点の集積や、石鏃123点等の集積、磨製石斧13点等の集積、剥片石器275点の集積など、各種のキャッシュがみられる（長沼編1987、図9-1）。石器の配置から、細長い袋状の入れ物に入っていたことが予想される。これらの

BP - 53

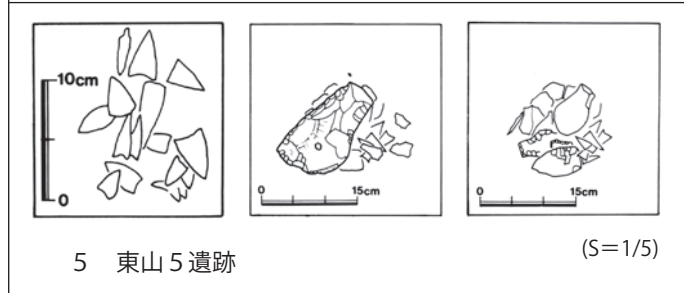
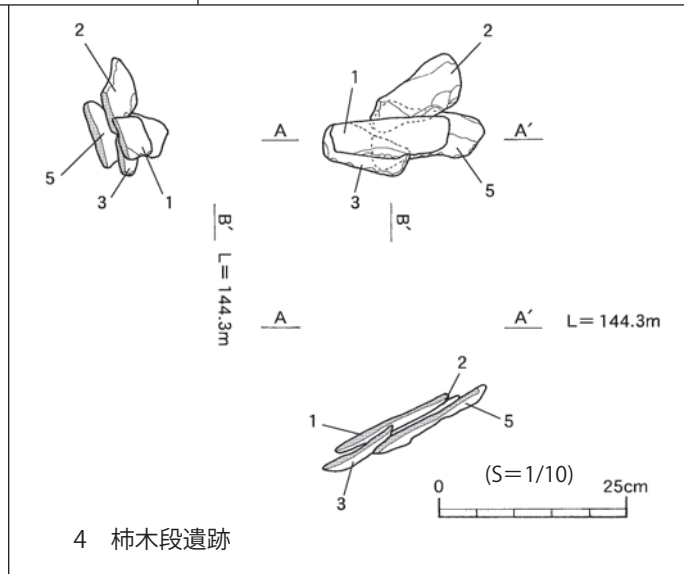
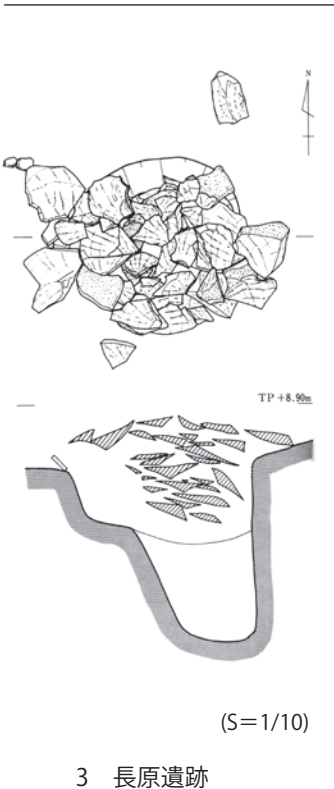
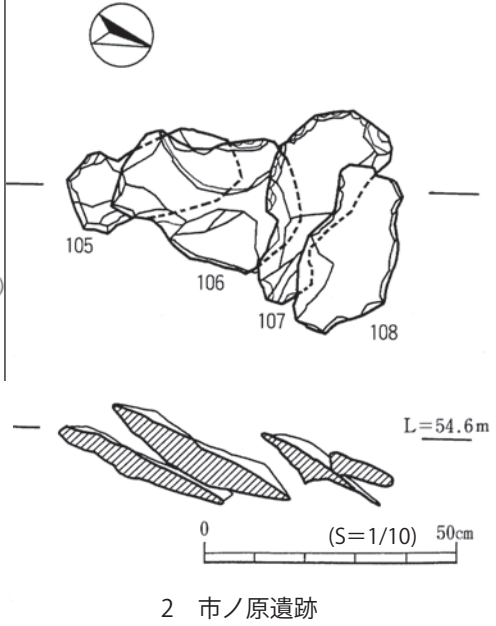
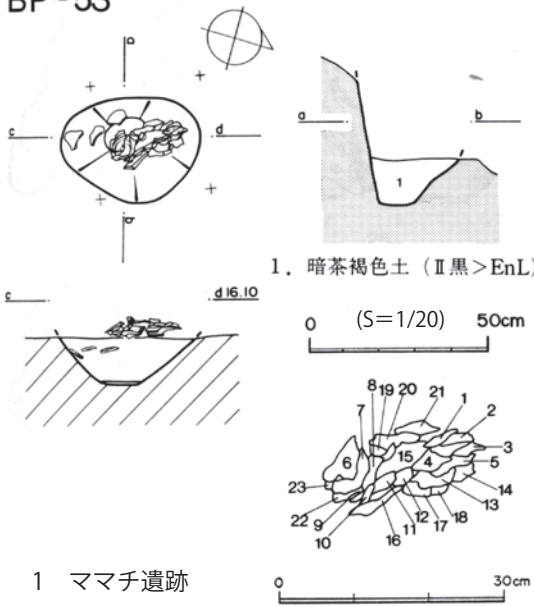


図9 縄文時代晩期のキャッシュ

キャッシュの内容は、土坑墓内に収められた副葬品の内容とも一致しており、一部にはベンガラが伴うため副葬品・供献品の可能性がある。

以上のように、晩期には瀬戸内を中心とした西日本にキャッシュが増加するのに対して、東北日本では減少するという、分布地域の変動がみられる。また、住居内キャッシュが無くなる等、縄文キャッシュ体系の解体の時期と評価できる。さらに、後晩期になると土坑墓内に石器が集積される副葬例が多くなる。副葬品は本論の集成対象ではなく、正確な数量変化を把握していないものの、副葬品が死者の所有物であると考えれば、それらの道具が個人所有であったことを想定できる。また、それらの道具が死後あるいは他界での使用を念頭に置いたものであったことが予想される。すなわち、この時期にキャッシュ戦略が、実用重視から思想重視へと転換されたことを物語っている。

4. 各器種のキャッシュ

都道府県別にキャッシュを集計すると、幾つかの中核地域が認められる（図10）。一見してキャッシュは北海道から東北北部にかけて多いことが分かる。東北では頁岩産地の日本海側よりも岩手県や福島県などの太平洋側の方が多点にその性格が示されている。また、信州産黒曜石の集積が長野県に通時的に多い。鹿児島県にも尖頭器や石斧、原石・石核のキャッシュがまとまって認められる。それぞれの中核域が離れており、キャッシュ行為が各地域社会の中で独立的に発生・発展したと考えられる。

日本列島の尖頭器、尖頭器未成品（両面加工石器）、石鏃のキャッシュを集成すると、明らかな地域性・時代性が見られる（図11）。尖頭器のキャッシュは神子柴石器群から縄文時代草創期前半にかけて本州東半に多く、縄文早期になると九州と北海道南部から東北地方にみられる。前期以降は、東北地方北部から北海道南部に限定される。尖頭器のような高度な製作技術を要する石器の場合、未成品で集積されることは少なく、基本的には完成形での集積となる。石鏃のキャッ

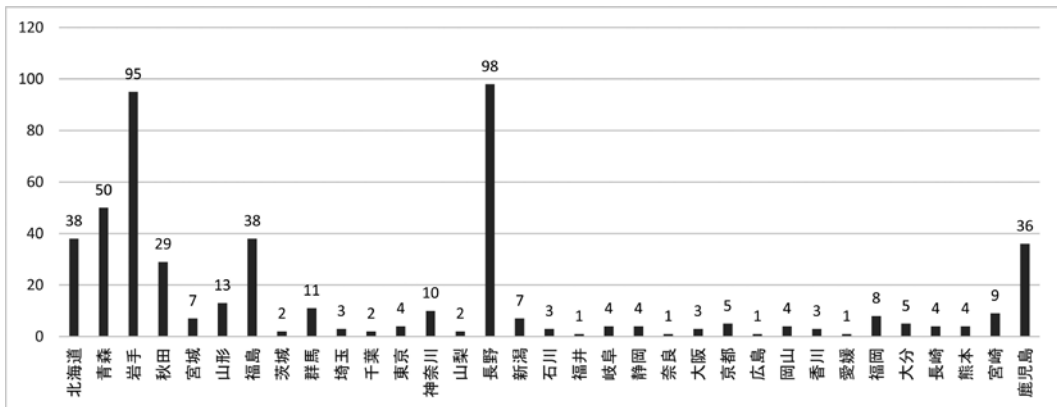


図10 都道府県別のキャッシュ検出数



図11 尖頭器・石鏃キャッシュの分布



図12 石斧キャッシュの分布

シュは時空間的に散発的に出現する。

石斧のキャッシュは、信州の神子柴石器群に現れる（図12）。縄文早期になると、南九州に多く確認される。前期以降は、東北の北半、関東から北陸、九州の南半という3つの地域圏を形成する。特に石斧未成品のキャッシュは早期以降に多く確認されるようになり、各製作工程が異なる場所で行われたことを示している。原石の獲得とブランク製作は打製技術で行われるため、比較的短時間の作業であり、集中的に原産地付近で実施できたと推測される。研磨のような時間を要する作業が集落内で行われたため、集落内にブランク集積が作られたと考えられる。一方で、拠点遺跡に流通財として確保された可能性もあり、幾つかの解釈が可能であろう。

石核と原石のキャッシュは、石材産地との関係で理解できる（図13）。渡島半島から東北地方日本海側では珪質頁岩、長野・神奈川・静岡では黒曜石、瀬戸内ではサヌカイト、九州では黒曜石の集積がみられる。原産地から極端に離れた場所には少ない。信州の焼失住居に一括土器や黒曜石原石集積が残される事例が多いことは（長崎1984）、当時の生活の状況を復元する上で、大いに参考になる。住居を新築する場合には、道具等は旧居から運び出され、通常は原石集積が残されることはなかったと考えられる。火災住居における黒曜石集積は、① 事故的な火災の可能性と、② 住人の突然死に伴うような住居の廃絶時にその住人の所有物も住居と一緒に燃やしてしまうという当時の思想・観念を反映している可能性のいずれかを示すものだろう。

トウールのキャッシュは、石核・原石のキャッシュと対照的な分布を示す（図14）。原産地付近から離れた消費地に作られる傾向がある。特に東北地方や北海道に多い。スクレイパーやトランシェ様石器、石篋のキャッシュは、組織的な皮なめしの場と考えられる。複数人による長

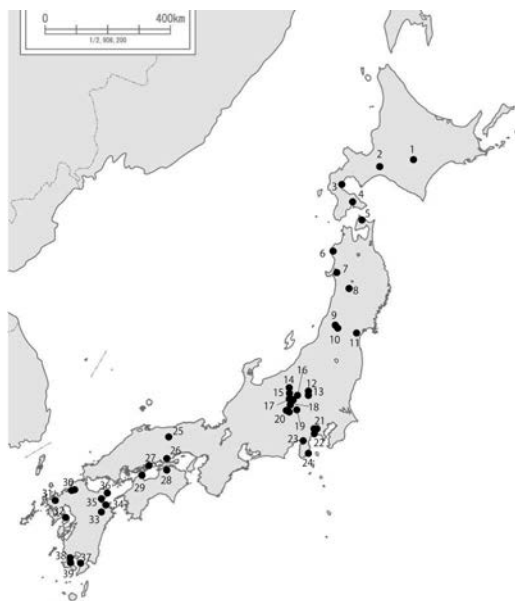


図13 石核・原石キャッシュの分布



図14 ツールキャッシュの分布

時間の作業が想定され、場の機能を反映し、一般に屋外に作られる。ツールのキャッシュは寒冷・多雪環境における作業キャッシュとその季節的利用に関係すると思われる。

次に剥片キャッシュであるが、渡島半島から東北地方にかけての頁岩地帯とその周辺に多い(図15)。必ずしも頁岩産地付近に立地する訳ではなく、消費地にも多いことが理解できる。縄文中期末に多することも含めて、当時の計画的な石材消費戦略と密接に関係したと評価できる。剥片キャッシュでは、第一に碎片が含まれるか否かによって、その性格が異なる。多くの碎片が含まれる場合には、廃棄に関わる行為や、製作物の一括埋納が予想される。また、少数の碎片が含まれる場合には運搬による破損や刃毀れの影響を考慮する必要がある。碎片がない場合には、特定のサイズや形態の剥片が選択されたと考えられる。したがって、ツールのサイズ・形態に応じた選択性を示すことが多い。例えば、石鏃用の剥片は薄く小さく、スクレイパーや石筥はより厚く大きな素材を必要とするため、剥片の法量の把握が重要となる。なお、剥片キャッシュは全体の38.7%を占め、時期的増減が大きいので、キャッシュの画期を反映している。縄文中期末が日本先史時代におけるキャッシュの最盛期であり、全体の10.9%を占める。その分布は東北地方が主体であり、住居内キャッシュが大多数を占める。この時期は遺跡数・住居数のピークに合致する(菅野2005)。すなわち、人口密度が増加したなか、住民たちは石器素材を集落単位で確保するのではなく、家屋単位で保管したと考えられる。その後、東北地方の中南部では遺跡数・住居数が激減することから、集落の解体期と言える。人口増加の中での家庭キャッシュが増加、つまり集落内の資源共有の観念(分かち合いの気持ち)が衰退したように見える点が興味深い。環状集落自体が分節構造をもち(谷口1999)、共同体内で家族単位の枠組みを強化しているため、



図15 剥片キャッシュの分布

人口増加と共に最終的に集落内の物資に対して
も家庭内利用の概念が徹底され、キャッシュに
その一端が反映された可能性が高い。縄文後期
前葉の集落の解体を踏まえれば、集落内の人間
関係の変化を映し出しているのかもしれない。

5. 日本列島の先史時代キャッシュの考察

現状のキャッシュの集成データを考慮すれ
ば、キャッシュの分類項目は① 器種・組成、
② 遺構・容器の種別、③ 完成品か未成品か、
④ 使用か未使用か、⑤ 製作残滓・不要物を含
むか否かという区分が可能である。各項目につ
いてみれば、①「器種・組成」は、石器自体の
機能がキャッシュの機能を直接的・間接的に反

映し、作業内容や兵站の目的を暗示する。単一器種であれば、専門的な作業に関連し、複数の器種であれば、複合的な作業や生活道具のセットを示すものと考えられる。②「遺構・容器」は管理・保管・使用の方法とその行為者の関係性を推察できる。例えば、住居外のキャッシュであれば、集落の共用品と考えられるが、住居内であれば家庭内利用と推定できる。仮に住居跡が専門的作業場であった場合には、特定の作業者集団に限定された利用が想定される。また、土器や袋などの容器に入れる場合や、土坑に埋納する場合、礫の上に置く場合があり、隠匿の要素の強さはキャッシュの共有性や使用の断続期間、使用頻度、季節的利用を反映している。③「完成品・未成品」は製作工程の一貫性や断続を示し、キャッシュは製作の中断に伴う石器の集積を意味する。したがって、製作工程のどの段階に位置するかを評価することが重要である。端的に言えば、生産に関わるもの、流通に関わるもの、消費に関わるものの3つに分類できるが、各項目が完全に独立的ではなく、複数の性格を併せ持つ場合も考えられる。また、完成品であれば、祭祀的埋納や製品の交易・流通、将来の使用を念頭に置いた保管との関係が強く示唆される。未成品ならば、石材獲得と製品の完成までの間の集積場を意味し、作業の中断を伴っている。したがって、その作業の中断の意味を理解することが重要となる。④は、未使用であれば、完成品やブランクとしての運搬や素材保管と関係が強い。それらの石器がどの程度の時間を置いて使われる見込みであったのかによって、評価が異なってくる。石器が使用されていれば、特定の作業場が反復的・再帰的に使用される状況か、あるいは日常的な反復利用を想定できる。⑤では、碎片や不要物が多い場合には特に廃棄に関係すると考えられる。少数の碎片が含まれる場合には、運搬時の破損を考慮する必要があり、容器に入れた状態での運搬後の埋納と推測できる。

さらに、集成の項目には示されていないが、遺跡・遺構の立地は、集落構造や流通経路とネッ

トワーク、運搬手段を反映している可能性がある。例えば、姫島産や神津島産の黒曜石の集積がみられる沿岸遺跡では、海上輸送後の集積が想定される。また、編籠や土器などの運搬時の容器が残っている場合も認められ、当時の運搬・保管手段を示している。さらに、石器の場合には石材産地を中心とした分布域を形成するため、各石材の流通圏とその運搬手段や輸送ルート、集落間の親密度や接触頻度などを予想できる可能性をもっている。

さて、最初にChildeによるデポの4分類（A家財の埋納、B供献の埋納、C商人の埋納、D鋳物師の埋納）やKilbyによる4分類（a. 保険（insurance）、b. 受動的（passive）、c. 積荷交換（load-exchange）、d. 余生（afterlife））を説明した。いずれの分類も、人間行動を推測すれば想定が可能であるが、上記のような現実の考古学資料は各分類に当てはめるだけの確実な証拠を提示できないと考えられる。また、先史時代の石器キャッシュの場合、その製作者（ChildeのD）と運搬者（C）、使用者（A）が同一人物であることも多々あると考えられ、Childeの分類が困難な状況が容易に予想される。つまり、各キャッシュが4分類のいずれかに該当するのではなく、複数の分類の要素を併せ持つ状況も考えられる。したがって、本論で示したような考古資料に即した分類を作成するというのが妥当な方向性である。その意味で、福島県の事例を集成した植村泰徳（1997）や岩手県の事例を集成した阿部勝則（2003）、長野県の黒曜石貯蔵を集成した長崎元廣（1984）の分類基準や個別の説明は客観的であると評価できる。本論とは異なり、三者では剥片集中や碎片集中を含むものの、個別の遺構の状況を詳細に吟味して評価している。残念ながら、本論では膨大な資料を対象としているため、個別の遺構の状況を全てに渡って解説することはできなかった。したがって、事例分析の視点を具体的に以下で提示し、その欠点を補いたい。

6. まとめにかえて

筆者は、縄文時代草創期のキャッシュに焦点を当てて、資料分析と発掘調査を続けてきた。対象となった主たる遺跡は、宮城県の野川遺跡である（工藤他1996）。仙台市教育委員会によって調査された2つのキャッシュを分析し、その特徴を明示した（鹿又2010）。分析では、器種組成を示し、石核となる両面加工石器を含む1号キャッシュと、石核を含まずスクレイパーが多い2号キャッシュの対照性を把握した。さらに前者は後者に比べて小さな剥片が多いことをその法量の比較から理解した。また、石器の使用痕分析では、前者は木の加工が見られるのに対して、後者では皮加工が中心であることが分かった。さらに、前者には石鏃とその未成品、その素材となる剥片が多いことが理解された。以上の点から、1号は狩猟具（石鏃や矢柄、弓等）の製作・メンテナンスと素材剥片の生産のための道具箱、2号は皮なめしのための道具とその素材剥片を入れた道具箱という機能分化がなされていたことが窺えた。さらに、石器の表面観察では運搬痕跡を思わせる表面の摩滅や傷が大型の石器に確認され、剥片の縁辺にも使用痕とは異なる刃毀れ（運搬痕）を確認した。特に1号キャッシュは袋に入れた状態で土坑に埋納されたような剥片類の重なり方であり、その上に大型の石器や石核が置かれている状態であった。

その後、筆者らが行った野川遺跡の再調査では、もう一つのキャッシュが確認された（東北大学大学院文学研究科考古学研究室2017）。このキャッシュには、石鏃の未成品1点とスクレイパー3点、二次加工ある剥片2点、微小剥離痕ある剥片6点、長さ3～5cm程の剥片75点が集積されていた（鹿又2018）。剥片類はその形状から石鏃の素材と考えられた。また、再調査で判明した重要な点は、野川遺跡が竪穴住居をもつ集落である点であった。キャッシュは基本的に住居外にあり、集石炉も屋外にあった。したがって、キャッシュを含む屋外施設は集落の居住者の共有物であったと考えられる。一方で、作業内容によってキャッシュが区別されていることから、男女による作業場の区別があったのではないかと推測している。こうした空間構造は、遺跡が回帰的（あるいは季節的）居住を念頭に置いた集落であったことを示している。遺跡内には多くの石鏃が出土しており、この地が狩猟活動に適した場であったことを示している。野川遺跡の再調査資料の分析はまだ完了していないため、総合的な評価は今後の課題であるが、既に行われたような詳細な分析がキャッシュの性格をより鮮明に描き出してくれる。こうした分析を他の遺跡にも広く応用することで、日本列島の先史時代の石器キャッシュの性格を明らかに出来ると考えられる。

本論では日本先史時代の石器キャッシュを全国的に集成することを試み、ある程度の傾向は把握できた。しかし、現実には全国の発掘調査報告書や書籍を網羅するには不十分であったと思われるため、今後は本論をベースにリストの不備を補い、継続的に集成に取り組んでいく計画である。関係諸賢からのご意見と本論の不備の指摘を切望している。

謝辞

本論を執筆するにあたって、以下の皆様にご指導・ご協力を賜った。柳田俊雄、菅野智則、佐野勝宏、寒川朋枝、柳田裕三。また、本論はコロナ禍を機に本格的な集成を開始したが、東北大学附属図書館や、全国遺跡報告総覧「遺跡リポジトリ」を繰り返し利用させて頂いた。オンライン閲覧ができる利便性を実感し、コロナ禍でも図書館を開館して頂いたことに日々感謝したことを記し、謝意を示したい。

引用文献（和文：五十音順）

- 秋成雅博2011『宮崎市埋蔵文化財調査報告書83：下猪ノ原遺跡第二地区1』（宮崎市教育委員会）
- 安部 実・渋谷孝雄1991『山形県埋蔵文化財調査報告書171：分布調査報告書(19)』（山形県教育委員会）
- 阿部勝則2003『岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について』『紀要』XXII（財団法人岩手県文化 振興事業団埋蔵文化財センター）pp. 1-16
- 池田祐司・菅波正人・山口譲治・吉留秀敏ほか2003『福岡市埋蔵文化財調査報告書741：大原D遺跡群4』（福岡市教育委員会）

- 石原哲彌・田中 彰・吉朝則富・渡辺 誠1993『高山市埋蔵文化財調査報告書21：前平山稜遺跡赤保木遺跡』（高山市教育委員会）
- 井田 篤・秋成雅博・今村結記2008『清武町埋蔵文化財調査報告書25：清武上猪ノ原遺跡31』清武町教育委員会
- 伊丹 徹・井澤 純・飯塚美保ほか1999『かながわ考古学財団調査報告58：No. 1 宮ノ前遺跡5』（財団法人 かながわ考古学財団）
- 市川正史・恩田 勇他1994『宮ヶ瀬遺跡群4 北原(No.9)遺跡(2)・北原(No.11)遺跡：宮ヶ瀬ダム建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21（神奈川県立埋蔵文化財センター）
- 稲田孝司編2009『恩原1遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 今村結記2010『清武町埋蔵文化財調査報告書30：五反畑遺跡B地区1』（清武町教育委員会）
- 植木 久・鈴木秀典・趙 哲済・松尾信裕・森 毅他1983『長原遺跡発掘調査報告3』大阪市文化財協会
- 植村泰徳 1997「縄文時代の剥片・碎片集中遺構、集中地点について—福島県内の事例—」『福島考古』38 pp.1-10
- 宇佐美雅夫2005『町内遺跡試掘調査報告書』檜葉町文化財調査報告書15（檜葉町教育委員会）
- 遠藤正夫・成田滋彦・豊島広美1981『青森県埋蔵文化財調査報告書63：鷹架遺跡発掘調査報告書』（青森県教育委員会）
- 太田昭夫・斎野裕彦ほか1992『富沢遺跡第30次調査報告書II（旧石器時代編）』仙台市文化財調査報告書160（仙台市教育委員会）
- 大竹幸恵ほか2001『県道男女倉・長門井線改良工事に伴う発掘調査報告書 鷹山遺跡群I遺跡及び追分遺跡群発掘調査』長門町教育委員会
- 大野憲司・利部 修・栄 一郎・佐野浩子1994『秋田県文化財調査報告書241：東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書16』（秋田県埋蔵文化財センター）
- 大場利夫・菅 正敏1977「枝幸郡浜頓別町日の出遺跡調査報告」『北海道考古学』第13輯 pp.59-77
- 小野 昭・島田和高・橋詰 潤・吉田明弘・公文富士夫ほか2016『長野県中部高地における先史時代人類誌 広原遺跡群第1次～第3次発掘調査報告書』明治大学黒耀石研究センター
- 利部 修・谷地 薫1996『秋田県文化財調査報告書263：東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書22』（秋田県埋蔵文化財センター）
- 合角 ダム水没地域総合調査会1995『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 勝又直人・壬生亮輔・杉山和徳2012『静岡県埋蔵文化財センター調査報告7：富士石遺跡III 第二東名No.142地点 縄文時代以降編長泉町-11』（静岡県埋蔵文化財センター）
- 門脇秀典2003「縄文石器に関する2・3の問題—檜葉町馬場前遺跡出土の石器について—」『研究紀要2002』pp.153-164

- 鹿又喜隆2008「神子柴・長者久保石器群とその後の時代—人類活動と環境変動との対応関係から—」『第22回東北日本の旧石器文化を語る会』 pp. 90-107
- 鹿又喜隆2010「更新世最終末の石器集積遺構に含まれる道具の評価—宮城県仙台市野川遺跡の機能研究と複製石器の運搬実験を通して—」『日本考古学』30号、pp. 47-63
- 鹿又喜隆・佐野勝宏編2016『最上川流域の後期旧石器文化の研究3 高倉山遺跡』東北文化資料叢書第9集
- 鹿又喜隆2017「石器をめぐる技術組織」『理論考古学の実践』 pp.184-202、同成社
- 鹿又喜隆2018「東北地方における回帰的居住の事例—宮城県野川遺跡—」『日本考古学協会第84回総会研究発表要旨』 pp. 128-129
- 川崎 保2003『大町市内その1：山の神遺跡2』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60（財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター）
- 川道 寛他1998『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書（富江町教育委員会）
- 菅野智則2005「複式炉を有する縄文集落の分布」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集 シンポジウム1「複式炉と縄文文化」』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
- 木許 守・小泉翔太・村島有紀ほか2017『玉手遺跡』御所市文化財調査報告書52（御所市教育委員会）
- 工藤信一郎・吉岡恭平・荒井 格ほか1996『仙台市文化財調査報告書205：野川遺跡』（仙台市教育委員会）
- 蔵本晋二1996『平池南遺跡』（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター）
- 栗村知弘・坂川 進・藤田亮一ほか1982『長七谷地遺跡発掘調査報告書』八戸市教育委員会
- 小林公明・樋口誠司・小松隆史2004『坂平』（富士見町教育委員会）
- 小林 敬1985『ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡』美幌町文化財調査報告1（美幌町教育委員会）
- 小林康男・鳥羽嘉彦他1982『舅屋敷』塩尻市教育委員会
- 小柳義男ほか1985『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—昭和51・52053年度』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
- 今 正幸、大場正善、安部将平2012『高瀬山遺跡 HO3期発掘調査報告書』財団法人山形埋蔵文化財センター報告書第200集（山形県埋蔵文化財センター）
- 坂本尚史・直江康雄2013『（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書302：白滝遺跡群13』（（公財）北海道埋蔵文化財センター）
- 佐川俊一・和泉田毅・末光正卓・阿部明義・富永勝也2003『財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書189：千歳市オルイカ2遺跡』（（財）北海道埋蔵文化財センター）
- 佐川正敏・鈴木雅編2006『日向洞窟西地区出土石器群の研究I』東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール、高島町教育委員会、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 迫 和幸・麻生順司・橋本真紀夫 1999『田名塩田遺跡群I』田名塩田遺跡群発掘調査団

- 佐藤庄一1990『山形県埋蔵文化財調査報告書150：押出遺跡発掘調査報告書』（山形県教育委員会）
- 佐藤庄一・黒坂雅人 1995『お仲間林遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書20
- 佐原 眞1985「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、pp. 523-573
- 塩地潤一・永松正大・古川 匠2008『横尾貝塚』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第83集（大分市教育委員会）
- 下村 修ほか2009『小鍛冶原・唐沢B』信毎書籍出版センター
- 下森鹿島遺跡発掘調査団1993『下森鹿島遺跡発掘調査報告書 先土器時代編』玉川文化財研究所
- 白石浩之・笠井洋祐1999『かながわ考古学財団調査報告48：吉岡遺跡群8』（財団法人 かながわ考古学財団）
- 新海和広・吉川寿朗・千葉史宏ほか2006『烏野上岱遺跡』秋田県文化財調査報告書406（秋田県埋蔵文化財センター）
- 菅原俊行・安田忠市1992『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（秋田市教育委員会）
- 杉本 誠・勝又 博・岡本範之・寺田光一郎ほか1994『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡 I・II』三島市教育委員会
- 鈴木孝志1969「北上川中流域の無土器文化—北上市周辺の遺跡—」『北上市史』第1巻、pp. 15-30
- 瀬川司男・小原信司・高橋信一郎2000『東和町文化財調査報告書26：安俵6区V遺跡発掘調査報告書』東和町教育委員会（ふるさと歴史資料館）
- 芹沢長介1978『岩戸』東北大学文学部考古学研究会 考古学資料集第2冊
- 田平祐一郎・野平裕樹2004『中種子町埋蔵文化財調査報告書8：園田／大園遺跡』中種子町教育委員会
- 高桑 登2019『山形県埋蔵文化財センター調査報告書235：八反遺跡第1～3次発掘調査報告書』（公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）
- 田中英司2001『日本先史時代におけるデポの研究』千葉大学考古学研究叢書1
- 谷口康浩1999「環状集落から探る縄文集落の構造と進化」『最新縄文学の世界』pp. 20-35
- 千葉孝雄1995『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書227：上八木田1遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
- 千葉正彦2008『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書520：吉田館遺跡発掘調査報告書』（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
- 堤 隆編1997『柏ヶ谷長ヲサ』（柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査団）
- 土屋 積・大竹憲昭2000『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48：信濃町内その1：貫ノ

- 木遺跡・西岡A遺跡14 旧石器時代』長野県埋蔵文化財センター
- 土屋 積・谷 和隆2000『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48：信濃町内その1：日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡15 旧石器時代 本文編』（長野県埋蔵文化財センター）
- 傅田恵隆他2012「最上川流域の後期旧石器時代文化の研究2 上ミ野A遺跡第3次発掘調査報告書」『Bulletin of the Tohoku University Museum』11、pp.1-194
- 東北大学大学院文学研究科考古学研究室2017「仙台市野川遺跡2017年度発掘調査」『平成29年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』pp.1-6
- 戸沢充則ほか1989『鷹山遺跡群Ⅰ』長門町教育委員会
- 戸田哲也・相原俊夫ほか1984『神奈川県大和市月見野上野遺跡第2地点発掘調査報告書』月見野上野遺跡調査団
- 都立府中病院遺跡調査会1996『武蔵国分寺跡西方地区武蔵台遺跡III』
- 直江康雄2008『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書261：白滝遺跡群9』（(財)北海道埋蔵文化財センター）
- 長崎元広1984「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学』III、pp.108-126
- 中田裕香・立田 理・遠藤香澄2002『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書167：八雲町野田生2遺跡』（(財)北海道埋蔵文化財センター）
- 長沼孝編1987『ママチ遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター発掘調査報告書36（(財)北海道埋蔵文化財センター）
- 長沼 孝・前田正憲・森岡健治・花岡正光1990『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書66：余市町栄町5遺跡』（(財)北海道埋蔵文化財センター）
- 中村真理2006「青森県金木町相野山遺跡」『考古学』3、pp.127-151
- 中村由克・立木宏明2008『七ツ栗遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会
- 中村和美・池畑耕一2003『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書52：上野原遺跡2』（鹿児島県立埋蔵文化財センター）
- 中村耕治・岩屋高広・廣 栄次・松下健生・川元貞久2005『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書83：農業開発総合センター遺跡群Ⅰ（窪見ノ上遺跡外）1』（鹿児島県立埋蔵文化財センター）
- 中村耕二・井ノ上秀文・富田逸郎・八木澤一郎2001『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書28：上野原遺跡』
- 中村耕治・新屋敷久美子ほか2016『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書7：町田堀遺跡』（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）
- 長屋幸二1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡：東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書』（岐阜県文化財保護センター）

- 贄田 明・小林秀行2007『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書82：茅野市内：駒形遺跡』
(財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター)
- 西井幸雄ほか1999『城見上／末野3／花園城跡／箱石5』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
211、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西田 茂・浦辻栄治1982『東山5遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書4 ((財)北海道
埋蔵文化財センター)
- 西田 茂・佐藤和雄・和泉田毅・谷島由貴・石川 朗1987『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報
告書40：鷹栖町嵐山2遺跡』((財)北海道埋蔵文化財センター)
- 西田 茂・熊谷仁志・立川トマス1993『茅室町北明1遺跡(2)・音更町西昭和2遺跡・池田町十日
川5遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書82 ((財)北海道埋蔵文化財セン
ター)
- 島山 昇2001『青森県埋蔵文化財調査報告書303：安田(2)遺跡2』(青森県埋蔵文化財調査セン
ター)
- 林 茂樹・上伊那考古学会編2008『神子柴』信毎書籍出版センター
- 繁昌正幸・三垣恵一・寺原 徹・森田郁朗2006『市ノ原遺跡第5地点』鹿児島県立埋蔵文化財セ
ンター発掘調査報告書(105)鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 伴信雄他1976「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その1、富士
見町その2—』長野県教育委員会
- 平井 勝・岡本寛久・阿部泰久ほか1993『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84：百間川沢田遺跡4』
(岡山県古代吉備文化財センター)
- 松井政信1980「第4章 福井県鳴鹿山鹿遺跡の石器群」『六呂瀬山古墳群』福井県教育委員会、
pp. 155-180
- 丸山浩治・岩渕 計・福島正和2004『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書441：宝性寺跡
発掘調査報告書1』(財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
- 三木陽平・勝見 譲・大竹幸恵1998『町内遺跡群詳細分布調査報告書—割橋遺跡群—』長門町教
育委員会
- 宮内克己1988『羽田遺跡(A地区)』(国東町教育委員会)
- 宮坂英弉1957『尖石』茅野市教育委員会
- 宮田栄二ほか2008『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書128：仁田尾遺跡25』(鹿児
島県立埋蔵文化財センター)
- 百瀬新治1975「長野市安庭遺跡出土の両耳土器」『長野県考古学会誌』21、pp. 43-44
- 森島 稔1968「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』第20巻第4号、pp. 11-22
- 森嶋 稔・川上元1975『男女倉』和田村教育委員会
- 村崎孝宏2015『熊本県文化財調査報告315：飛田遺跡群1』(熊本県教育委員会)
- 村田晃一・真山 悟・伊藤 裕ほか1987『宮城県文化財調査報告書122：小梁川遺跡3』(宮城県教

育委員会)

守屋昌文1986「第1節5 黒曜石の集中箇所」『高風呂遺跡』茅野市教育委員会

彌栄久志・平木場秀男・福永修一・石原田高広2005『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書88：南田代遺跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

彌栄久志・遠矢勝幸ほか2010『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書154：加治木堀遺跡 宮ノ本遺跡 椿山遺跡 柿木段遺跡 野方前段遺跡A地点1』（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

柳澤 亮・寺内隆夫・市澤英利2005『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書69：聖石遺跡・長峯遺跡・（別田沢遺跡）』（長野県埋蔵文化財センター）

山口敏幸2015「根引池遺跡周辺の原石集積遺構」『九州旧石器』第19号、pp. 107-110

山内幹夫・阿部 力・佐藤悦夫・鏝水 実・国井秀紀1996『摺上川ダム遺跡発掘調査報告I』福島県文化財調査報告書319（(財)福島県文化センター）

山内幹夫・吉田秀亨・宮田安志・能登谷宣康ほか2003『常磐自動車道遺跡調査報告34 馬場前遺跡（2・3次調査）』（財)福島県文化振興事業団

山形敏行・中村有希2019『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書24：川久保遺跡C地点』（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）

山田隆一・大野 薫・館 邦典2012『ミヤケ北遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-8（大阪府教育委員会）

八幡一郎1938「(四) 原始文化の遺物 縄紋式文化」『日本文化史体系』第1巻、pp. 142-214（誠文堂新光社）

吉田格他1975『栗山 栗山遺跡発掘調査報告書』小金井市文化財調査報告書4（小金井市教育委員会）

渡辺誠編1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会、平安博物館

(英文：アルファベット順)

Binford L. R. 1979 Organization and formation processes: looking and curated technologies. *Journal of Anthropological Research*, 35-3, pp. 255-273

Binford L. R. 1980 Willow Smoke and Dog's Tails: Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archaeological Site Formation. *American Antiquity*, 45, pp. 4-20

Childe, V. G. 1930 *Bronze Age*. Cambridge at the University Press.

Erlanson J. M. and T. Braje 2011 From Asia to the Americas by Boat? Paleocology, and Stemmed Points of the Northwest Pacific. *Quaternary International*, 239, pp. 28-37

Hurst, S. 2017 Territorial perspective on lithic caching: Insights from Garza Protohistoric (1450-1650 CE) caching strategies on the Southern Plains, USA. *Quaternary Interna-*

tional (2017) pp. 1-13

Jennings T. A., C. D. Pevny, and W. A. Dickens 2010 A biface and blade core efficiency experiment: implications for Early Paleoindian technological organization. *Journal of Archaeological Science*, 27 (2010), pp. 2155-2164

Kilby, J.D., 2008. An Investigation of Clovis Caches: Content, Function, and Technological Organization. Unpublished Ph.D. dissertation, University of New Mexico, Albuquerque.

Peresani M. 2009 The range of caching behavior among the past hunter-gatherers of Europe. *Du matériel au spirituel (Réalités archéologiques et historiques des «dépôts» de la Préhistoire à nos jours)*, XXIXe rencontres internationales d'archéologie et d'histoire d'Antibes. Sous la direction de S. Bonnardin, C. Hamon, M. Lauwers et B. Quilliec Éditions APDCA, Antibes, pp. 87-95

Tabarev, A. V., D. A. Ivanova, and Y. Kanomata 2021 Knap & keep: Late Palaeolithic-Neolithic caches, Far East. *Documenta Praehistorica*, XLVIII pp. 2-11

*表1に取り上げた文献は紙数の関係で、表末に刊行機関（あるいは著者名）と刊行年度のみを記載した。

表1 日本列島先史時代の兵站遺構の一覧

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
後半	後期旧石器	岡山	恩原1	2	7	Ea	水晶	粗割り水晶3点+水晶製石核2点の集積、1m離れて水晶製石核2点	T3, BP21石核集中、T3, BP20石核集中	恩原遺跡発掘調査団2009	
		宮城	富沢	1	6	Eb? 製作址	珪質頁岩	UF1、石核1、FL3、礫片1。包含層のものとの接合	27層上面、17×14×14cm。	仙台市教育委員会 1992	
		山形	お仲間林	1	190	Ea	珪質頁岩	径4.5m約190点の頁岩原石。	6~31cm、0.1~14.1kg。原石を搬入し、一旦集積した場。石刃核に不適。	山形県埋蔵文化財センター 1995	
		神奈川	下森鹿島	1	14	Ea	チャート、砂岩、泥岩	石核14（剝離初期工程）、SC1、FL1	第3文化層の9号ユニット	下森鹿島遺跡発掘調査団 1993	
			田名向原A-2	1	9	Ea	黒曜石	原石8（曇ケ塔）、剥片1（和峠峠）	2号ブロック（第67図、図版7）	田名塩田遺跡群発掘調査団 1999	
		静岡	観音洞B	1	10	Eb	黒曜石	休場層下部の長径0.55×短径0.55m、深0.22mの土坑底面に原石10	110~380gの総重量2kg超。赤化している。	三島市教育委員会 1994	
		大分	岩戸	1	1	Ea	スレート	石核1	大型礫の下に隠匿	東北大学文学部考古学研究会1978	
		長野	西岡A	1	4	Ea	無斑晶質安山岩	石核4	SH09石核4点集中	長野県埋蔵文化財センター 2000	
			追分第4文化層	1	不明	Ea	黒曜石	不明		長門町教育委員会2001	
			鷹山I-M地点	1	不明	Ea	黒曜石	原石や大型剥片を多数含む	集石状	長門町教育委員会1989	
			割橋第Ⅶ	1	14	Ea	黒曜石	黒曜石原石14点が直径50cmの範囲に固まる	IV中・IV下相当。試掘区「か」から。	長門町教育委員会1998	
			男女倉J地点	3	不明	Ea	黒曜石	ホA26グリッド、黒曜石原料・石核1001点	30点前後の原石を集積した箇所が幾つかある（図面上3か所）。	和田村教育委員会1975	
		終末		仁田尾	2	13	Ea	安山岩	礫器4、大型石核3、叩石1	Ⅲ文化層の16ブロックに径1mにまとまる。	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020
		不明	鹿児島	宮臨	1	7	la	安山岩、砂岩、頁岩、ホルンフェルス	磨石、叩石、棒状礫	1号礫群、Xb層、接合・被熱なし。最終的に礫群と判断されている。	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020
初頭	縄文時代早期	岩手	持川	1	7	Da	珪質頁岩	打製石斧7・若干の剥片。	積み重なる状態で土地改良工事に発見。	鈴木孝志1969	
		秋田	綴子	1	7	Ca	珪質頁岩	尖頭器7点（完形品5、破片3）	発掘ではない	八幡一郎1938	
		神奈川	勝坂	1	2	Ca	凝灰岩	尖頭器未成品2点が軸を揃えて並んで出土。	第2集中	相模原市市道機部上出口改良事業地内遺跡調査団 1993	
			横倉	1?	?	C	玄武岩	尖頭器40・剥片3	5mから出土。集積かは不明。	神田五六・永峯光一1958、永峯光一1982	
		長野	小鍛冶原	1	7	Ca	黒曜石	両面調整石器7・片面調整石器1、石刃1（頁岩製）。	桑植林の畝床から7点が重なり合う。さらに2点が表採	下村修他2009	
			七ツ栗	1	2	Da	酸性凝灰岩	神子柴型局部磨製石斧2点	基部を重ねた状態で	信濃町教育委員会2008	
			唐沢B	1	8	Ba	珪質凝灰岩、硬質頁岩等	尖頭器2、ES1、BL1、FL2、砥石2	スポットf	千曲川水系古代文化研究所 1998	
				1	5	Da	黒色頁岩	打製石斧3、剥片2	スポットd		
			宮ノ入	1	5	Db	頁岩	局部磨製石斧5	植林作業中に発見、頁岩製	森島稔1968	
				神子柴	1	5	Ba	珪質頁岩、黒曜石、玉髓	尖頭器6、ES・SS6	スポットc	林茂樹・上伊那考古学会編 2008
		1			5	Ca	玉髓、凝灰質頁岩、下呂石	尖頭器5	スポットb		
		1	3	Ea	黒曜石	石核3	スポットe				
		北海道	斗満	1	21	Ca	黒曜石、頁岩	尖頭器13・ES1・石刃7	中央に空白部を残し、石器が幾つかの小群に分かれる。	明石博志1996	
		前半	山形	日向洞窟西地区	1	3	Da	珪質頁岩	局部磨製石斧2+打製石斧1	Ⅶ層上面検出、G-18区	東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール他2006
1	1			G	珪質頁岩	1cm以下のチップ多数	Ⅶ層上面検出、F-12区の土坑（直径80cm）				
神奈川	吉岡 D区			1	4	Db	ホルンフェルス	径44cm、6kgの蓋石と径28cm、4.9kgの礫の下から礫斧1、礫器2、打製石斧1	D区4ブロック有舌尖頭器の包含層から埋納遺構	かながわ考古学財団 1999	
	月見野上野第2地点			1	7	Aa	安山岩	大型FL7	有舌尖頭器・陸線土器を伴う剥片集中（A-9区）	月見野上野遺跡調査団1984	
福井	鳴鹿山鹿			1	25	Ca	安山岩、砂岩	大型尖頭状石器、有舌尖頭器22、石核2		福井県教育委員会1980、大野延太郎1897	
後半	宮城	野川	1	454	Ab	珪質頁岩	両面加工石器4、石籠1、石鏝1、ドリル1、小型尖頭器2、スクレイパー類4、剥片・砕片約440点。	第1土坑から、剥片は平均3g程。接合あり	仙台市教育委員会 1996		
			1	48	Ab	珪質頁岩	第2土坑からスクレイパー類7、石籠1、剥片約40点。	第1土坑の剥片に比べて大きい。接合は少ない。			
			1	88	Ab	珪質頁岩	第3土坑から88点中FL75	窪穴住居外			
		山形	日向洞窟西地区	1	100	Aa	珪質頁岩	剥片多数（5~10cm前後の剥片100点前後を集積）	Ⅶ層掘下げ時に検出、E-21区剥片集中	東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール他2006	
				1	1	Aa	珪質頁岩	剥片多数	Ⅶ層掘下げ時に検出、E-20区剥片集中		
1	1	Aa+Ca	珪質頁岩	多数の剥片の下に尖頭器未成品2+尖頭器再加工品1	Ⅶ層掘下げ時に検出、F-25区剥片集中						

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典
後半	縄文時代早期	山形	日向洞窟西地区	1	4	Ba	珪質頁岩	打製石斧2、尖頭器未成品1、大型剥片1	VI層にて45×25cmの扁平な凝灰岩礫の直下に、40cm前後の範囲に収まる。	東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール他2006
		秋田	岩瀬	1	149	Aa+Ea	珪質頁岩	両面調整素材7、SS7、FL135(CHなし)。	Ⅶ層下位のSX595から。接合資料5点	秋田県埋蔵文化財センター1996
				1	47	Ab	珪質頁岩	石匙1、剥片46点。	Ⅶ層のSX093掘り方内から	
				1	381	Ab+E	珪質頁岩	両面調整素材2、両面調整石器3、剥片・砕片376点。	Ⅶ層のSXQ71掘り方内から。接合9点	
				1	49	Ac+C	珪質頁岩	石楯1、剥片48(CHなし)	Ⅶ・Ⅷ層のSXQ67から	
				1	7	Ca+Ea	珪質頁岩	両面調整石器4、石鏃3	Ⅶ層のSX557から	
				1	6	Ea	珪質頁岩	両面調整石器6点	Ⅷ層SX594から	
		福岡	大原D	1	54	Ac	黒曜石	SL048(25×12cm)：剥片53、原石1	剥片と原石の集積	福岡市教育委員会2003
				1	10	Cc	黒曜石	SL81: AH10	SC003内中央部東寄りの石鏃の集積	
				1	10	Cc	黒曜石	SL82: AH10	SC003中央部炭層の石鏃の集積	
				1	11	Cc	黒曜石	SL83: AH4が平面的に重なり、2本が立った状態で、1点が3m程離れて、少し離れて原石1、剥片3	SC003西側壁際の石鏃の集積	
		1	2	Ec	黒曜石	原石2	住居跡SC014中央の土坑SX038内東壁際、板状炭化物の上に原石2点	福岡市教育委員会2003		
福岡	仙台南前A地点	1	6	Ba	珪質頁岩	円盤状石核1、磨製石斧1、半月形石器1、石鏃2、片面加工石器1	大型の磨製石斧が最上部にある	福岡市振興公社1988		
草創期～早期	宮城	蒲沢山	1	6	Aa	珪質頁岩	大型剥片(写真では6点)。	報告書は未刊	仙台市教育委員会1996	
初頭	山形	日向洞窟遺跡	1	4	Cc	珪質頁岩	凹基石鏃4点が集中(SU01石鏃集積遺構)	1号竪穴遺構の床面東部に	東北芸術工科大学2019	
前半	北海道	山崎4	1	54	Aa	珪質頁岩	剥片53、RF1	FC-19(0.73×0.7m)、D地区住居跡H-10の外、西側	北海道埋蔵文化財センター2001	
中葉	長野	山の神	1	15	Ba	主にチャート、2点が玉髓または石英	トトロ石器、総数41点の異形局部磨製石器。集中出土であり、一括埋納ではない	I-V-23区の遺物集中SQ01(1.3×0.7m)から異形部分磨製石器14点と石鏃1点。I-V-18区からトトロ石器5点	長野県埋蔵文化財センター2003	
			1	4	Da	変塩基性岩、透緑閃石岩、砂岩	磨製石斧3点、磨製石斧未成品1点	SQ02から直立した状態で出土		
		北海道	静川8	1	3	Da	蛇紋岩1、緑泥砂岩1、不明1	磨製石斧3(1点328mmと長大)	北西の沢の西向き斜面。並行に並ぶ(第5-3図版)	苫小牧市埋蔵文化財調査センター1990
中葉以降	縄文時代早期	福島	下ノ平D	1	5	Ba	珪質頁岩	石鏃5	半両面加工であり、斉一性の高い5点	福島市振興公社文化財調査室1995
後葉	山形	岩手	休場	1	111	G	頁岩	チップ111点(24.7g)	5号竪穴住居跡中央南側のP1埋土。チップが炭化粒と共に出土。接合なし。	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2000
		山形	松原	1	12	Ba	珪質頁岩	トランシエ様石器4点、接合する剥片4点	No.138遺構	山形県教育委員会1991
末葉	青森	長七谷地8号	1	70	Ac	珪質頁岩	2組、6点が接合。ぎっしり詰まった状態	第3号竪穴住居跡ビット(25~30cm×深10cm)覆土	八戸市教育委員会1982	
		表館(1)	1	236	Aa	頁岩	剥片類236点	第1号剥片集積跡。住居跡に隣接	青森県埋蔵文化財調査センター1989	
		1	数千点	Aa	珪質頁岩(多)、頁岩、チャート	剥片数千点	第2号剥片集積跡			
		長崎	小ヶ倉A	1	10	Ea	黒曜石	5m程の原石が、一部剥離礫を含め十数点		雲仙市教育委員会2012
		宮崎	白ヶ野第2・3	1	3	lb	溶質凝灰岩	磨石3点	アカホヤの次堆積層中。長軸を平行に30×40cmの楕円形のやや浅い掘り込み中に1~2m間隔で並べた	宮崎県埋蔵文化財センター2002
早期中葉～前期前葉	福島	南諏訪原	1	4	Ba	珪質頁岩	石鏃2・石匙1・ES1	東の谷IV e・f層、石器集積1(15×15cmの自然の窪みに4点)	福島市振興公社1991	
早期後半～前期前葉	宮崎	岩手	吉田館	1	54	Aa	頁岩	剥片54(うち18点、8例の接合資料)	剥片埋納遺構SX04(32×45×深11cm)	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2008
		下猪ノ原第2地区	1	16	Ba	玉髓、チャート、頁岩、安山岩	挟入石器16	環状廃棄遺構の中央に3号石器埋納遺構が位置する	宮崎県教育委員会2011	
早期後葉～前期初頭	青森	鷹架	1	2	Ba	珪質頁岩	大型石匙2(長16.4cm、幅5.2cm、厚1.1cmと14.8cm、4.7cm、0.8cm)使用痕あり	D地区A-40・第Ⅲ層から背面を上にして、つまみ部の向きは同じで、重ね合わせた状態	青森県教育委員会1981	
		大分	横尾貝塚	1	2	Ea	黒曜石	姫島産石核(重さ10.3kg、と重さ12.2g)2点が並ぶ	82-3SX021	大分市教育委員会2008
早期末～前期初頭	大分	横尾貝塚	1	69	Aa	黒曜石	姫島産の原石と剥片69個以上(40×30cmの範囲)	水場遺構内で掘り方が無く、編物・バスケット入り黒曜石原石82-3SX070		

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典
早期末～前期初頭		岩手	桜松	1	887	Ab	泥岩	FL877+トール10、接合29個体（307点が接合）	J10ピット（0.65×0.61×深0.24m）中、接合29、トランシェ様石器・自然面打面	岩手県埋蔵文化財センター 1982
早期末～前期初頭	青森	岩手	下赤林Ⅲ	1	28	Aa	頁岩、凝灰岩	不定形・RF・UF	遺構外	岩手県教育委員会 1979
			売場	1	272	Ab	珪質頁岩	剥片272点、接合資料があり、破片類はほとんど見られない。	剥片集中遺構（60×20cm）にレンズ状にまとまる。	青森県埋蔵文化財調査センター 1985
			長七谷地貝塚	1	27	Cc	珪質頁岩	特に石鏃4点と尖頭器11点は結束様の状態で出土。	第5号住居跡西壁に接して検出した第35号ピットから完形石器27点が一括出土。	青森県教育委員会 1980
	静岡	鉄平	1	3	Da	ホルンフェルス2、砂岩1	石斧3点	石斧集積遺構、2点が重なり、1点が少し離れる。基部が同一方向を示す	静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003	
縄文時代早期	岐阜	前平山稜	1	4	Ba	チャート	トロトロ石器（異形局部磨製石器）4点を配置	祭祀遺構、東西南北を向くように大小4点を配置	高山市教育委員会 1993	
		様ヶ野	1	34	Aa	チャート製	8点はUFまたはRF、2.5～6.5cm	アカホヤの下の層で検出	高城町教育委員会 2002	
		上猪ノ原第3地区	1	2	Da	ホルンフェルス、砂岩	同軸で重なり、1点が横位で立った状態	石斧2点埋納遺構	清武町教育委員会 2008	
		五反畑 B地区	1	6	Ba	頁岩	SC2・RF4	1号石器埋納遺構、同一母岩を材料とする	清武町教育委員会 2010	
	宮崎	向原中尾第2-2次	1	2	Db	ホルンフェルス	打製部分が残る磨製石斧2点	土坑58×49×深10cmに、石斧2点	宮崎県埋蔵文化財センター 2012	
		矢野原	1	21	Aa	チャート	21点、節理面で剥離してものが多く、ほとんどに二次加工がある	2号土壌外の南西側に	宮崎県教育委員会 1995	
			1	156	Ab	チャート	3～7cm、節理面で割れて板状を呈するものや、スクレイパー、二次加工、使用痕が認められるもの。チップを含まない。	3号土壌（径0.3×深0.1m。）床面に積み重ねるように置かれた		
	鹿児島	上野原	6	25	Db	ホルンフェルス、粘板岩、頁、緑色泥岩、細粒砂岩	石斧埋納6（1号2点、2号4点、3号5点、4号4点、5号2点、6号8点）、磨石集積3	環状遺物集中の中心の空白域に石斧埋納	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001	
		熊本	柿原 城馬場 第2地点	1 1	3 1	Ca Ab	サヌカイト チャート	表探 SC1、大型FL多数	1×2mの範囲から出土 11号土坑（大型剥片）	杉村1967・1985 熊本県教育委員会 1991
	山形	富山	1	188	Eb	珪質頁岩	F3層から113点、底面から75点。15～20cmの円礫	SK03（5.6×4.9m、浅い頁岩集積穴）・石器集中地点の下位	山形県埋蔵文化財センター 1998	
		梶ノ原	1	3	D	不明	3本のデボ	2本が同軸で重なり、1本が少し離れる	加世田市教育委員会 1999	
		大中原	1		D		石斧	石斧集積遺構	根占町教育委員会 2000	
		1		I		磨石	磨石集積			
		倉園B	1		I		磨石	磨石集積	志布志町教育委員会 1984	
吹上小中原		1	3	Ca	ハリ質安山岩	石槍3	石槍集積遺構	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005		
鹿児島		前畑	1	7	Da	頁岩	打製石斧4本、大型剥片2、扁平礫1	D-11区石斧集積遺構	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003	
		園田	3	10	Ca	安山岩	尖頭器9点分と磨石1点	3か所：A～C群	中種子町教育委員会 2004	
		界子仏	1	4	D		石斧4本	石斧集積遺構	牧園町教育委員会 1989	
		高天原	1	4	D		石斧4本	デボ	牧園町教育委員会 1997	
		上リヤマナイ	1	544	Aa	黒曜石	赤井川産のSC4、石核1、両面調整石器10、MF4、RF53、FL472	FC-1剥片集中（0.31×0.25×深さ0.13m）	北海道埋蔵文化財センター 2006	
早期～前期？		山形	八反	1	20	Bc	珪質頁岩	ES10とFL10合わせて20点。ES2点は接合。	SK6302（第3面から検出、1×0.7mに	山形県埋蔵文化財センター 2019
早期～中期	鹿児島	前谷	1	3	D		石斧3本	石斧集積遺構	松山町教育委員会 1986	
早期～前期中葉	新潟	関川谷内	1	3	Ia	玄武岩質安山岩、花崗岩、角閃石安山岩	石器集積1	稜磨石3点	新潟県埋蔵文化財調査事業団 1998	
	福島	天光	1	6	Ba	珪質頁岩	石鏃6	デボ直径60cm程の自然の窪みから出土	福島県文化センター 1989	
早期～前期	北海道	TK-60	1	7	B	黒曜石（すべて白滝産）	石槍10、つまみ付きナイフ1、SC1、小型鏡長FL1	石器の集中出土（径2m）	常呂町教育委員会 2004	
早期～中期	熊本	日の出	1	58	CaDa	主に黒曜石	尖頭器類50・磨製石斧8	一括出土	大場利夫・菅正敏1977	
		曾畑貝塚	1	51	F		貝輪51		清野謙次1969	
不明	縄文時代前期	鹿児島	南田代	1	66	Aa	主に安山岩	安山岩製剥片65、黒曜石製石核1	剥片集積1基	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005
				1	5	Da	ホルンフェルス5、頁岩1	打製石斧3・剥片2点	石斧埋納1号	
				1	6	Da	ホルンフェルス	磨製石斧6	石斧埋納2号	
				1	8	Ea	黒曜石	15点、うち8点が集中（針尾産）	黒曜石埋納1基	
				1	5	Ia	砂岩3、輝石安山岩1	磨石4・石皿1・礫56	磨石集積1号	
				1	4	Ia	砂岩3、輝石安山岩1	磨石4	磨石集積2号	

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
不明	縄文時代前期	秋田	堂の下	1	382	Ea	珪質頁岩、玉髓	石楯未成品1、石核6、剥片361、砕片14点、総重量15.9kg。縦長剥片5点、1組の接合。母岩ほぼ1つ。それ以外は3点。最上部に大型剥片(長軸27.7×厚さ13.2、3.5kg)が乗る。	石器集積遺構SX292(直径0.94mの円形、深さ0.42m)	磯村 亨・吉川耕太郎 2009	
				1	40	Eb	玉髓	原石40点	直径40cm、深さ15cmの土坑から		
			河原崎	1	48	Ab	頁岩	剥片48点と多数のチップ。15点が接合(おそらく尖頭器製作)。原石の表皮側が復元され、30×15cmとなる。	31号土坑の南壁側の埋土中から。剥片48点とその直下からチップが塊状に出土。土坑底面には石器は達しない。	秋田市教育委員会2009	
			上掬	1	4	D	アオトラ石	磨製石斧4		庄内1987	
			上谷地	1	71	Aa		剥片46(うち1点にRT)+25、接合10組	SV03(35×30cmに46点の剥片。2m以内にさらに25点)	秋田県埋蔵文化財センター 1994	
		青森	中里(2)	1	32	Aa	珪質頁岩	剥片	剥片集積遺構、径26cm、高さ18cm	十和田湖町教育委員会 2001	
			表館(1)	1	2	Ca	頁岩	尖頭器2が軸を揃え、向きを逆にして	A地区	青森県埋蔵文化財調査センター 1989	
		大分	羽田	5		E	黒曜石	石核	姫島産の石核の埋納5ヶ所。最大12.5kg	国東町教育委員会 1988	
			須久保	1	3	E	黒曜石	石核3	姫島産の石核3点を埋納	大分県教育委員会1993	
		福島	下ノ平D	1	17	Aa	頁岩	剥片17点。4~10cmの縦長剥片が多い。2組・5点が接合	C2-B25グリッドから一括出土	福島市振興公社文化財調査室 1995	
			東釧路貝塚	1	2	Ca	黒曜石	尖頭器2点が重なる		釧路市埋蔵文化財センター 2010	
		北海道	嵐山2	1	13	Ca	黒曜石	両面加工の石楯1・石匙1・ES1。すべて白滝産	掘り込みは不明。厚さ5cm以上。	北海道埋蔵文化財センター 1987	
			美沢10	1		Ba	多様	石冠・SS2・石鏢3		北海道埋蔵文化財センター 1987	
			山崎5	1	2	Ea	頁岩	尖頭器2点(1点はSCと報告、長さ200mmと長さ136mm)	重なって出土。	北海道埋蔵文化財センター 2002	
		初頭	青森	風穴	1		Aa	珪質頁岩	剥片集積		三沢市教育委員会 1990
				湯野	1	4	Dc	粗粒玄武岩	磨製石斧2+2。	第38号竪穴住居跡の北東側のビットに2点が調整剥離面を合わせて埋納、南西側でも打製石斧2点が原礫面を合わせて埋納、磨石のデボ1例	青森県埋蔵文化財調査センター 2007
不明	長野	阿久	1	28	Ea	黒曜石	原石28	CX37周辺に集積。18×20cmに積み重なる。			
			1	500	Ec	黒曜石	原石、石核がまとめて出土。住居内に石核・剥片500点程、楔が多く35点。	住居址71の北壁中央部の床面から	長野県教育委員会1985		
初頭	長野	舅屋敷	1	10	Ec	黒曜石	原石、2~3段に積み重なる	第2号住居址床面上の集積	塩尻市教育委員会 1982		
			1	9	Ea	黒曜石	原石8点、剥片1点	23号住居(前期初頭)の南西壁際のビット内			
		高風呂	1	14	Eb	黒曜石	原石12点、石器2点	遺物包含層中の浅い皿状のビット内	茅野市教育委員会1986		
			1	9	Ec	黒曜石	原石9点	37号住居(前期初頭)の南東壁際の浅いビット内			
福島	羽白D	1	16	Aa	頁岩	石核2点と剥片14点が集中	P21グリッド(LIV中)から	福島県教育委員会1987、1988			
		1	10	Aa	頁岩	剥片10点が集中	Q28グリッド(LIV中)から				
		1	36	Ab	鉄石英製	石核2と剥片34点が集中(2~3母岩)	1号剥片密集遺構(径28cm、深さ17cm)の上面から				
初頭~前葉	秋田	鳥野上岱	1	24	Aa	頁岩・珪質頁岩主体、僅かに流紋岩	剥片24	SXQ78、80cmの範囲	秋田県埋蔵文化財センター 2006)		
			1	6	Ba	剥片1点が流紋岩である以外は、頁岩・珪質頁岩	凹基石鏢1、石匙2、石鏢1、剥片2、赤色礫1	SXQ77、15cmの範囲			
前葉?	長野	駒形	1	5	Eb	黒曜石	諏訪星ヶ台産の原石4、剥片1。総重量396.41g	SK25黒曜石集積遺構。径45cm、深さ7~8cm。	長野県埋蔵文化財センター 2007		
			青森	砂沢平	1			剥片		大鰐町教育委員会 2004	
前半	長野	芝ノ木・一ノ瀬	1	不明	Ab	黒曜石	チップ	第I次第18号住居跡の炉脇に直径20cmのチップ集中範囲(浅い皿状)	茅野市教育委員会 2001		
前葉	長野	坂平	1	5	Ea	黒曜石	原石(流紋岩が付着した状態)	39号住居跡外、東の黒曜石集積	富士見町教育委員会 2004		
			1	6	Ea	黒曜石	原石(流紋岩が付着した状態)	41号住居跡上縁の黒曜石集積			
	福島	宇輪台	1	28	Ac	頁岩	剥片28点	4号住居跡床面に密集	福島市振興公社文化財調査室 1993		

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典		
前葉		北海道	リヤムナイ3	1	5	Da	緑色泥岩3と青色片岩2(石斧)、頁岩(スクレイパー)	磨製石斧5点とその直下からスクレイパー1点が一括出土。土坑なし。	S-1集石	北海道埋蔵文化財センター 2005		
				1	3	Ca	頁岩	尖頭器3点	FC-40	北海道埋蔵文化財センター 2006		
				1	296	Da, Ba	頁岩、黒曜石	石鏃20、石槍1、つまみ付きナイフ4、SC19、楔2、石核7、RF5、頁岩FL145、黒曜石FL73、その他のFL3、石斧6、磨石3、石鏃2、スコリア1、礫・礫片4	石器集中1 (0.65×0.22×深さ0.1m) から			
				1	14	Da	緑色泥岩製13、泥岩製1	緑色泥岩製13、泥岩製1	集石S-7			
1	3	Da, Ba	頁岩製1、片岩1、緑色泥岩1	頁岩製のつまみ付きナイフ1、石斧2(片岩と緑色泥岩)	焼土F-27							
前葉～中葉		岩手	力持	1	不明	Aa	未記載	剥片	BH122住居跡2号の北側に剥片貯蔵穴	岩手県埋蔵文化財センター 2008		
前葉か後葉		群馬	注連引原	1	3	Ea	黒曜石	原石3点(第25図)	星ヶ塔産の貯蔵	安中市教育委員会 1987		
中葉		秋田	上ノ山1	1	2	Ba	緑色凝灰岩	鋒形石器2点(長さ38cmと長さ34.2cm)	VI層中	秋田県埋蔵文化財センター 1988		
				群馬	天神原	1	36	Eb	黒曜石	原石(角礫) 36点	D-201号土坑	安中市教育委員会1997
				群馬	中野谷松原	1	7	Eb	黒曜石	小型原石7点がビット(P-7)内から	環状集落の西辺のJ-106号住居址内の南壁際	安中市教育委員会 1998
						1	1	Eb	黒曜石	長さ12cm、重さ3.5kgの大型原石(2枚の試し割り面)	D-1078号土坑の中央	
				群馬	吹屋伊勢森	1	8	Ec	黒曜石	柱穴脇のビット内から8点の小型の原石と石核(星ヶ塔)	5号住居内	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006
						1	1	Ea	黒曜石	超大型原石(長さ18.7cm、重さ1.8.8kg)	1点のみ	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982、1987
中葉～後葉		群馬	頭無	1	3	Da	黒色頁岩	打製石斧2点が刃部を北に向けて重なった状態で、1点が隣接して	Z-1号石器配置遺構	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988		
				1	2	Da	黒色頁岩	打製石斧2点がほぼ平行に軸を南北にして	Z-2号石器配置遺構			
				1	2	Da	黒色頁岩	打製石斧2点が長軸を南北にして立てて置かれていた	石器配置遺構			
中葉		埼玉	円阿弥	1	4	Dc	砂岩2、緑泥片岩1	磨製石斧2、打製石斧1、敲石1	10号住居跡床面南縁中央部、掘り込みなし	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991		
				1	4	Dc	不明	磨製石斧2、打製石斧2	住居床面の石斧埋納	蓮田市教育委員会 1986、1991、1992		
				山形	押出	1	22	Bc	珪質頁岩	ツール18点、FL2.道具箱と呼ばれる	ST-11住居跡内、各種石器の一括出土	山形県教育委員会 1990
秋田県	臼館跡	1	8725以上	Ab	珪質頁岩	尖頭器未成品1、SS1、残核13、接合資料24点、敲磨器1。母岩20。	SK100土坑(0.74×0.62m、深さ0.34m)の埋土2から(埋土は3枚)	秋田県埋蔵文化財センター 2012				
後葉		岩手	上八木田 I	1	52	Ac?	未記載	剥片52点(フレーク群との記載のみで、キャッシュかは不明。写真・図なし)	IXD3住居跡の床面から	岩手県埋蔵文化財センター 1995		
				群馬	広面	1	4	Ec	黒曜石	柱穴がある程度埋没した状態で原石4点を置いた	J1A号住居跡内	富士見村1994
				長野	神籠石	1	不明	Ea	黒曜石	トラック1台分	石切り場の洞穴	藤森栄一1966
後半		岩手	埜山牧場 I B	1	232.37g	Ac	未記載	232.37g	RA03住居跡PP3埋土中	岩手県埋蔵文化財センター 2000		
				長崎	門前	1	6	Da	安山岩4、蛇紋岩2	磨製石斧4、打製石斧2	刃先を全て東に揃える。製作段階のもの	長崎県教育委員会 2006
				鹿児島	天神段	1	3	Da	ホルンフェルス2、凝灰岩質安山岩1	磨製石斧3本	D24区、Va層で検出。基部を合わせて、三方に分かれる	鹿児島県教育委員会他 2016
						1	5	Db	頁岩、ホルンフェルス、砂岩	石斧4本(119, 123, 124, 144)が2対になって出土。さらに1点(121)を土坑検出前に取り上げている。	17層の土坑から、磨製、打製、未成品が混ざる	鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996
				宮城	小梁川	1	317	Ac	頁岩	317点の剥片、16母岩、28点の接合、RTは8点のみ、チップを含まない	37号住居跡1号土坑	宮城県教育委員会 1987
末葉		長野	一の釜	1	25	Eb	黒曜石	星ヶ塔産の原石25(副製品)	第55号土坑(直径90cm、深さ30cm)から、列状にあたかも細長い袋に入ったかのような状態で	長崎県 1984		
				1	1	Ec	黒曜石	黒曜石集積	第1次第58号住居址の浅い皿状の窪みから	茅野市教育委員会 2001		
				1	1	Ea	黒曜石	超大型原石(2052g)	宮坂2004			
				1	1	Ab	黒曜石	黒曜石片2868g	78号土坑から。3号住居址に切られる。	茅野市教育委員会 2001		
				1	72	Eb	黒曜石	原石61点と剥片・破片11点(総重量1,859g)	47号住居(前期中葉)覆土中に掘り込まれたビット内	茅野市教育委員会1986		

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
未業	縄文前期	長野	荒神山	1	14	Ea	黒曜石	原石14点	直径20m、深さ15cmの範囲で黒色土中から	長野県教育委員会1975	
			北山葛蒲沢A	1	8	Eb	黒曜石	原石8点（総重量2549g）が集積。ほとんどが大型の原石	280号土坑	茅野市教育委員会1996	
前期後半または晩期		青森	笹子(2)	1	4	Da	粗粒玄武岩、凝灰岩、頁岩2	磨製石斧未成品2+敲石2	3層中、やや散漫に。掘り方なし	青森県埋蔵文化財調査センター 2010	
前期末～中期前葉		岩手	石管根	1	300	G	硬質頁岩	300点中接合7、平均長4.89m (N=79)	2Q-1住居跡焼土と共にまとまって。	岩手県埋蔵文化財センター 1992	
前期末～中期初頭	鹿兒島	上水流		1	7	Ea	黒曜石	7個の石核・母核で構成	掘り込みは不明	鹿兒島県立埋蔵文化財センター 2010	
				1	15	Ea	ハリ質安山岩	15個の石核・母核で構成			
				1	9	Ea	黒曜石	9個の石核・母核で構成。(上牛鼻産8+長谷産1)			
				1		Ea	黒曜石	7個の石核・母核で構成			
				1	6	Eb	黒曜石	6個の石核・母核で構成(上牛鼻産)			
		青森	沢ノ黒	1	2	Ea	頁岩	両面加工石器2点	2点並んで	青森県埋蔵文化財調査センター 2007	
		長野	大洞		0	-	黒曜石		その他、破片集中2	長崎元廣1984	
				1	12	Ea	黒曜石	全部で原石12個、10個が積み重なり、2個が巨礫の上。総重量688.8	1号ブロック		
				1	8	Ea	黒曜石	原石7個、総重量2470g	2号ブロック		
				1	7	Ea	黒曜石	原石7個、総重量310.8g	3号ブロック		
	1			7	Ea	黒曜石	原石7個、総重量237.6g	5号ブロック			
			1	4	Ea	黒曜石	原石4個、総重量550.9g	7号ブロック			
後業	前期	長野		1	50	Ec	黒曜石	原石36点、石核14点（総重量1498g）	住居址内の窪地に黒曜石集積11	岡谷市教育委員会2005	
前期末～中期初頭	長野	清水田		1	62	Ea	黒曜石	こぶし大の原石62点（総重量8413.5g）。そのほか、包含層から6.5kgの大型原石あり	黒曜石集積10		
		北山葛蒲沢B		1	不明	Ec	黒曜石	不明	1号住居址集積遺構1	茅野市教育委員会 2002	
				1	10	Ea	黒曜石	原石10点（星ヶ塔）	SF3028号焼土内	長野県埋蔵文化財センター 1998	
				1	2	Ea	黒曜石	原石2点（星ヶ塔）	SF3028号焼土から西に3m		
	松原		1	4	Ec	黒曜石	原石4点（星ヶ塔）が貯蔵とされる	SF3024号住居内			
前期末～中期		岩手	宝性寺	1	7	Bb	頁岩5、ホルンフェルス1	土器片1、RF1、石筍2、FL2、磨製石斧1	第1号デポ（47×23×深21cm）から	岩手県埋蔵文化財センター 2004	
前期～中期		北海道	国見2	1	6	Da	片岩	丸のみ形石斧1、磨製石斧未成品5が束ねられた状態	風倒木の肩部から	北海道埋蔵文化財センター 1990、1988	
中期～後期	埼玉	塚越向山		1	29	D-Ecd	黒曜石	底の方から磨製石斧10点を小さい順に詰め、その上に粘土と詰め、次に原石3個をのせ、周囲に剥片13、チャート剥片3個を入れる	6号住居跡炉内、注口付鉢形土器に入れて埋置	合角ダム水没地域総合調査会 1995	
			新潟	沖ノ原	1		B		冠状土製品1・打製石斧1		津南町教育委員会976
			長野	福松砥沢	1	不明	E	黒曜石		黒曜石集積	諏訪市教育委員会 2004
不明	縄文時代中期	群馬	平塚台	1		E		原材25		藤岡市教育委員会1994	
		秋田	北の林II	1	34	Ab	頁岩（石英と記載）	剥片34、5cm前後で破片なし	5-Rグリッドのビット中	秋田県埋蔵文化財センター 1982	
		青森	上尾敷(2)	1	?	Ac、Bc、廃棄	珪質頁岩、角閃石、安山岩	石鏃1、尖頭器2、石筍3、石匙1、不定形石器3、敲磨器2	第4号竪穴住居跡の埋土11にまとまる。意識的な廃棄。	青森県埋蔵文化財調査センター 1988	
		石川	下町茶畑	1	7	D	不明	打製石斧7		七尾市教育委員会 1993	
			茅野和田	1	2	Ec		10cm程の黒曜石塊2点	西7号住居跡の西壁付近	茅野市教育委員会1970	
		長野	梨久保	1	55	Ea	黒曜石	黒曜石塊55点（うち1点に剥離痕）が積み重なって	1号住居跡の床面に浅く掘り窪めた小穴から	岡谷市教育委員会 2009	
			目切	1	不明	E	黒曜石	黒曜石埋納		岡谷市教育委員会2005	
			荒神山	1	10	Ea	黒曜石	原石が上に7点、下に3点	25～18mの範囲	長野県教育委員会1975	
		東京	武蔵台	1	6	Dd	砂岩・緑泥片岩	定角式磨製石斧6点（すべて完形）	瓢箪形土器内。不安定な土器のため土坑に埋納か？	都立府中病院遺跡調査会 1996	
		北海道	ピラオツマッコウマナイチャシ	1	12	Ba	黒曜石	ES12（11点が固まり1点が離れる）	N-3スクレイパー集中	美幌町教育委員会 1985	
		初頭	長野	大石	1	11	Ec	黒曜石	原石11点	1号住居跡、詳細不明	長野県教育委員会1976
				梨久保		1	52	Eb	黒曜石	黒曜石塊18点（うち3点に剥離痕）と剥片34点（剥片はズリ状）	P2から
	1				51	Eb	黒曜石	黒曜石塊10点（うち1点に剥離痕）と剥片41点（剥片はズリ状）	直径50cm、深さ21cmのP3から		
船霊社				1	50	Ea	黒曜石	原石36+剥片・破片10数点	14号住居址外の北側2mに、第2地点（60cm四方、特に20cm四方、深さ15cmに28点が集積）	長野県教育委員会 1980	
				1	77	Ea	黒曜石	原石65+剥片・破片12	4・5号住居址の東、第1地点（45×25×深15cm）安山岩に囲われて出土		

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典		
初頭		長野	船霊社	1	20	Ea	黒曜石	径3~4cmの原石が20点程集中	るルームマウンド1号の底面にある落込みから	長野県教育委員会 1980		
			細田北	1	3	Ec	黒曜石	原石3点	3号住居址内から	飯田市教育委員会 1990		
前半		新潟	大沢谷内	1		-	不明	テポ土壌墓		新潟市文化財センター 2012		
			神奈川	長津田遺跡群 No.1宮之前	1	4	Da	未記載	楕形の打製石斧3点、短冊形の打製石斧1点	深鉢の下に打製石斧3点、近接し打製石斧1点	かながわ考古学財団 1999	
		長野	尖石	1	5	Ec	黒曜石	原石5点		茅野市教育委員会1957		
			芝ノ木・一ノ瀬	3		Ec	黒曜石	黒曜石集積3	第1次第41号住居の柱穴から	茅野市教育委員会 2001		
		北海道	野田生2	1	96	Bb	玄武岩、頁岩	両面調整石器3、石槍1、スクレイパー2、RF6、UF2、FL82	P-13埋納遺構から。母岩2種、接合15点	北海道埋蔵文化財センター 2002		
			山崎4	1	23	Aa	珪質頁岩	RF5、FL18。15点の接合。縦長剥片の連続剥離	FC-7、0.37×0.24×0.1m。B地区	北海道埋蔵文化財センター 2001		
前葉		神奈川	原口	1	7	Ea	黒曜石	大形原石や石核が7点（神津島産）径8cm前後、351~1048g	J1号黒曜石集積、掘り込みなし	かながわ考古学財団 2002		
			津山	1	7	Eb?	珪質頁岩	両面加工石器7点	第57号土坑の開口部に重なって出土	青森県埋蔵文化財調査センター 1997		
		青森	笹ノ沢(3)	1	19	Aa	頁岩	剥片17点の上に、小型磨製石斧1、スクレイパーが折り重なり、その周辺から石鏃1と剥片5が出土。	第19号堅穴住居跡、中央南壁付近。ピット38の上にあり廃絶後に持ち込まれたもの。	青森県教育委員会2004		
			長野	藤内	1	27	Ec	黒曜石	黒曜石塊27点	7号住居跡の北壁裾	藤森栄一編1965	
		東京	徳久利	1	5	Ec	黒曜石	黒曜石の大塊5点	1号住居跡の南の床面	藤森栄一編1965		
			栗山	1	5	Da	頁岩2、千枚岩2、砂岩1	打製石斧4+1	F19区	小井井市教育委員会1975		
前葉～中葉		青森	三内丸山(6)	1	67	Ac	頁岩	同一母岩、接合7組	第39A号堅穴住居跡ピット上面～覆土上部（深さ10cm）	青森県教育委員会2001		
中葉	縄文時代中期	岩手	荒谷 A	1	200	G	凝灰岩質チャート	200点、母岩2以上廃棄単位	Ha53住居跡埋土（廃棄層）	岩手県埋蔵文化財センター 1983		
			山梨	甲ツ原	1	6	Da	未記載	楕形・短冊形の打製石斧6と礫1、土器片1	B区1号住居跡外の北側。2本ずつ対になって直行におかれる。上に礫1点がやや浮いた状態で出土	山梨県埋蔵文化財センター 1992	
		青森	近野	1	45	Ac	珪質頁岩	MF14, RF16, CH4, FL11、2母岩	第E120b号堅穴住居跡底面下、6組の接合、19点に接合関係	青森県埋蔵文化財調査センター 2005		
			上向	1	不明	Ea	黒曜石	原石と砕片	8号住居跡の南西外			
		1		11	Ec	黒曜石	原石11点	11号住居跡内の（住居より少し新しい）小23号堅穴の下部、中・上位に集石を施す		上向遺跡発掘調査団 1983		
		茅野和田	1	5	Ec	黒曜石	原石5点	西15号住居跡				
			1	33	Ec	黒曜石	4cm程の原石33点。さらに付近から7点の黒曜石が出土	西27号住居跡の炉の西方の1か所		茅野市教育委員会1970		
		居沢尾根	1	21	Ec	黒曜石	原石21点のうち一部が固まって出土	1号住居跡の南東壁下にかたまつて		長野県教育委員会1981		
			1	7	Ec	黒曜石	原石6点と石核1点	24号住居跡の北東壁下の床面から積み上がった状態				
		茅野和田	1	不明	Ec	黒曜石		西8号住居跡の西壁付近		茅野市教育委員会1970		
		後葉		中島	1	20	Ec	黒曜石	原石を2~3段に集積	第19号住居跡の南東壁下に23×21cm、深さ9cmのピットがあり、中に7~5cm角の20個を貯蔵	塩尻市教育委員会1980	
		後半		長野	与助尾根	1	10	Ec	黒曜石	黒曜石の中塊が10数個一団となつて	24号住居跡の床面	茅野市教育委員会1957
		1	8		Ea	黒曜石	原石6、石核1、剥片1	2号黒曜石集積、窪地に				
		中期中葉～後期前葉			塩野目尻	1	28	Eb	黒曜石	原石23点、剥片と両極打撃痕ある石片各2点、1箇所の剥離痕がある原石1点	1号黒曜石集積、掘り方あり	茅野市教育委員会 2006
中葉		棚畑	1	42	Ec	黒曜石	奥壁近くP4内の南西部。床下19~36cmの深さまでの17cmの厚さの中に、原石42個がごっそり入る。柱の脇に埋置	第108号住居跡黒曜石集積遺構No.1				
			1	31	Ec	黒曜石	南壁に近いP9の脇。29×17cm、深さ26cmの楕円形の穴の上部の4~6cmの深さに原石31個がまとめて入る。	第108号住居跡黒曜石集積遺構No.2	茅野市教育委員会1990			
			1	60	Ec	黒曜石	南東側の出入口付近のP6とP7の間。20×15cmほど、深さ17cm、穴の5~10cmの深さに原石60個がまとめて入る。	第108号住居跡黒曜石集積遺構No.3				

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典					
中葉		青森	富ノ沢(3)	1	3	Ca	頁岩	石槍3点がまとまって出土。 2点は同軸で重なる。		青森県教育委員会1998					
後葉	縄文時代中期	長野	棚畑	1	9	Ea	黒曜石	西壁近くの覆土上面から原石9点	第117号住居跡覆土上面黒曜石集積遺構	茅野市教育委員会1990					
1				12	Ec	黒曜石	原石12点が平面的に密接した状態	第45号住居跡の炉の南西、低くなった貼床に黒曜石集積遺構							
1				16	Ec	黒曜石	東コーナー部のP15の東脇にある。貼床は不明ながら、レベル的にほぼ床面。黒曜石原石16個が集積	第131号住居跡黒曜石集積遺構							
中葉?			林の峰	1	4	Eb	黒曜石	良質の石核4点	50号土坑内		茅野市教育委員会 2000				
中葉			荒神山	1	8	Ec	黒曜石	原石8点	112号新住居跡の南壁下の床面		長野県教育委員会1975				
中期中葉～後期後半			宮平	1	4	Ea	黒曜石	黒曜石原石3+石核1		御代田町教育委員会 2000					
中期中葉～		東京	西ヶ原貝塚	1	6	F		ヤス状骨角製品6		都内重要遺跡調査団1998					
後葉	縄文時代中期	岩手	棚畑	1	21	Ac	頁岩	21点	1号住居跡浅皿状の落ち込み(10×8cm)にまとまる	岩手県教育委員会 2002					
1				40	Ac	チャート質粘板岩	5×3cmの剥片	L11-1住P1埋土と床上・炉の近く	岩手県埋蔵文化財センター 2013						
1				27	Ac	鉄石英、頁岩	SS1, ES1, FL27、石核1、砕片多数、剥片11と石核1が接合	17号住居跡P1のb1層(掘り方)	宮古市教育委員会 1990						
1			16	Ac	メノウ	合計16点の剥片。粗割り段階。同一母岩	S104住居跡のPit 2・3間の床面で剥片集中(SX01)を検出。径10cm程の範囲に	S108住居跡北側床面に剥片集中(SX03)。30×10cmの帯状の範囲に	RA33住居跡内の土坑FP①にびっしりと詰まった状態。記述のみ。図や石器出土状況の写真なし	岩手県埋蔵文化財センター 2001、2020					
											1	55	Ac	頁岩	55点の素材剥片。全長6.4～1.4cm、平均値は4.1cm
											1	60	Ac	チャート	剥片60点、5点2組の接合
											1	11	G	頁岩	剥片11、廃棄
中葉					1	55	Ac	タンバク石	4点2組の接合	RA35住居跡内の土坑FP②にびっしりと詰まった状態					
1			17	Ac	頁岩		RA37住居跡炉の直下								
後半					1	10	Ac	チャート質粘板岩、流紋岩、凝灰岩	二次加工ある剥片や剥片が10点	33号住居跡小ピット覆土中	岩手県埋蔵文化財センター 1993				
後葉	縄文時代中期	岐阜	山手宮前	1	20	Ab	チャート	剥片20点(平均長さ47、幅44、厚さ12mm、重さ24.7g)	剥片集積90×55cm。立位で重なる。同一母岩、接合あり	岐阜県文化財保護センター 1997					
1				13	-	泥岩	鍾13点	石鍾集積40×25cm、							
1		53	Ac	頁岩	SS1、ES2、RF4、Co2、FL40(石刃状の縦長剥片を含む)、CH3、計53点中23点が接合。	S1904竪穴住居内の南西隅・壁際・床面に石器集積土坑。折り重なった状態	SK31(44×29×深10cm)土坑から。接合資料から打製石斧・石鏝を製作か?	秋田県教育委員会2002							
									1	371	Ab	頁岩	同一母岩の小剥片が371点とその石核が一括出土。チップを含む。接合資料あり。		
									1	314	Ab	頁岩	同一母岩の剥片とチップが314点かたまって	SK72土坑から	
									1	14	Ac	頁岩	14点の剥片が一括出土。11枚は同一母岩で、10枚が接合	S173BのP1柱穴の北側床面から	
1		51	Ac	珪質頁岩	剥片51点、5母岩、球状の密着状態、袋に入っていたと推定	S1221住居P11から剥片貯蔵	秋田県埋蔵文化財センター 2006								
中期中葉～後期前葉		新潟	鰐口下	1	2	Da	砂岩、閃緑岩	打製石斧2(いずれも横長剥片素材・背面が自然面、未成品)	並列して出土	新潟県教育委員会 1989					
後半		神奈川	東原	1	5	Dc	不明	打製石斧5	住居床面の石斧埋納	相模原市当麻・下溝遺跡群調査会1992					
後葉	縄文時代中期	青森	三内丸山	1	24	Ac	珪質頁岩	FL23、RF1。8母岩・接合2組	第603号竪穴住居跡、ビット(直径19cm、深さ4cm)底面～覆土	青森県教育委員会 1998					
1				8	Ac	珪質頁岩	母岩複数・接合2点	第3号竪穴住居跡床面、北東壁際。掘り込みなし。S-1	青森県教育委員会 2004						
後半以前			松ヶ崎	1	14	Ac	珪質頁岩		第11号竪穴住居跡床面	八戸市教育委員会1994					
1				?	Ac	珪質頁岩	チップ440g	第7号竪穴住居跡住居跡壁際、床面、周溝、写真2							
1				51	Ac	珪質頁岩	剥片51点、360g	第13号竪穴住居跡P19ビット覆土							

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
後葉	縄文時代中期	青森	松ヶ崎	1	78	Ac	珪質頁岩	剥片78点、810g	第13号竪穴住居跡P46ビット覆土	八戸市教育委員会1994	
				1	70	Ac	珪質頁岩	剥片70点、2500g	第14号竪穴住居跡P12ビット覆土		
				1	47	Ac	珪質頁岩	剥片47点、2050g	第14号竪穴住居跡P13ビット覆土		
後半	長野	海戸	1	17	Ec	黒曜石	拳大の原石17点がかたまっていた	36号住居跡の奥壁近く、柱穴そば	岡谷市教育委員会1968		
1			11	Ec	黒曜石	原石11点	53号住居跡の床面を掘り窪めて				
後葉		1	梨久保	1	6	Ea	黒曜石	屋外の黒曜石集積がPL104にある	9次G地点中層	岡谷市教育委員会 2009	
				1	8	Ec	黒曜石	大きめの黒曜石原石8点（写真では剥片9点）	17号西壁際の柱穴P3の縁から		
				1	7	Ec	黒曜石	図上に黒曜石集積の記載。写真では4点が見える。分布図を見ると石核3、石嶺4が含まれる。石核は両極石核	55号住居の北西壁際の周溝上		
				1	8	Ec	黒曜石	図上では8点が表示されている	60号住居南西壁際、周溝からP15の間。両極石核		
後半		1	上の平	1	2	Ec	黒曜石	黒曜石塊2個	第2号住居跡のP2北東側に	茅野市教育委員会 1995	
				1	8	Ea	黒曜石	石核8（うち1点は両極石核）。周囲からも石核と原石が多量に出土	僅かに第10号住居跡と重複	茅野市教育委員会 2001	
中期後半～後期中葉		1	大桜	1	9	Ea	黒曜石	原石9点の上面に大きな礫	3区、1号集積	茅野市教育委員会 2004	
				1	5	Ec	黒曜石	黒曜石5点	9号住居跡の戸の北西側の柱穴際の床面上	長崎元廣1984	
後葉	縄文時代中期	福島	塩沢上原A	1	大量	Ac	頁岩	3号住居跡（S103）P2（主柱穴）から剥片（小型、49点）が写真）が多量に出土（2母岩）		福島県教育委員会1985	
				1	大量	Ac	頁岩	7号住居跡（S107）P7（周溝にある柱穴）から剥片（大型、10点が写真）が多量に出土（1母岩）			
未葉	不明	北海道	上清水4	1	8	Ea	黒曜石	原材8（この場で割った痕跡はなく、搬入物）	K-49-d区。径20cm、掘り込みなし	北海道埋蔵文化財センター 1991	
				1	不明	Ac	珪化木	接合なし	5-32-S15、北側隅の床面、フレイク集中部、袋詰め埋納？写真図版32	岩手県埋蔵文化財センター 1999	
不明	1	下館銅屋	1	16	-	頁岩		5-26	岩手県埋蔵文化財センター 2001		
			1	8	-	瑪瑙		5-2-PP4、埋土上部			
末葉	1	古館	1	19	Ac	凝灰質珪質泥岩	母岩1、接合3	III-D-3住居跡埋土	岩手県埋蔵文化財センター 1998		
			1	40	Aa	チャート	小円礫を両極剥離・粗割りした剥片	SV06剥片集中遺構から、径15cmの範囲に密集。有機質の容器に収められて収納か？	岩手県埋蔵文化財センター 1983		
中期末～後期	1	大日向Ⅱ	1	5	Ac	珪質泥岩、チャート	楔5	CVII-04住居跡西壁際P05南西脇	岩手県埋蔵文化財センター 1995		
			1	多数	Ac	珪質泥岩	剥片	VD2c住居跡の西壁際床面から	岩手県埋蔵文化財センター 1983		
末葉	縄文時代中期	岩手	名高根	1	37	Ac	珪質細粒凝灰岩	剥片37点、同一母岩、接合3組、6点、UF21、5cm未満のFL多	B I -3住居の柱穴P7埋土上・中部から剥片貯蔵	岩手県埋蔵文化財センター 1983	
				中野台	1	14	Ac	不明	同一素材、石材不明	1住居跡のフレイク貯蔵A、北側床面の僅かな落ち込み	大東町教育委員会 1997
					1	8	Ac	不明	同一素材、石材不明	1住居跡のフレイク貯蔵B、西側床面の僅かな落ち込み	
			1		10	Ac	不明	同一素材、石材不明	1住居跡のフレイク貯蔵C、南側周溝の壁面		
			1		11	Ac	不明	同一素材、石材不明	2住居跡の前庭部底面の僅かな落ち込み		
			1		24	Ac	不明	同一素材、石材不明	3住居跡の床面中央西側の僅かな落ち込み		
			1		25	Ac	不明	同一素材、石材不明	3住居跡のP8埋土上部		
			1		19	Ac	不明	同一素材、石材不明	4住居跡床面の浅い落ち込み		
			1		7	Ac	不明	同一素材、石材不明	4住居跡床面の浅い落ち込み		
			1		7	Ac	不明	径5～7mmの大きめの剥片、同一素材、石材不明	12住居跡床面西側の浅い落ち込み		
			1	148	Ac	不明	同一素材、石材不明	14住居跡床面西側のP9埋土上段			
			1	31	Ac	不明	同一素材、石材不明	16住居跡床面南壁周溝付近			

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典
末葉	縄文時代中期	岩手	中野台	1	14	Ac	不明	同一素材、石材不明	24住居址床南側の浅い落ち込み	大東町教育委員会 1997
				1	7	Ac	不明	同一素材、石材不明	24住居址床南側の浅い落ち込み	
				1	66	Ac	不明	同一素材、石材不明	28住居址炉前庭部の立ち上がり付近	
				1	15	Ac	不明	同一素材、石材不明	28住居址南側周溝	
				1	7	Ac	不明	同一素材、石材不明	33住居址炉前庭部の立ち上がり付近	
				1	11	Ac	不明	同一素材、石材不明	33住居址南側周溝	
				1	30	Ac	不明	同一素材、石材不明	33住居址南側周溝	
			南畑	1	12	Ac	不明	同一素材、石材不明	37住居址北側周溝付近	岩手県埋蔵文化財センター 2001
				1	21	G	泥岩質	泥岩、長さ平均4.7mの縦長剥片が主体、同一母岩、	8号住居跡埋土から。一括廃棄か	
			湯沢	1	25	Ac	硬質泥質凝灰岩、細粒凝灰岩	UF2, 切断石器2	DII-3住居址南東壁際の小ピット中	岩手県埋蔵文化財センター 1983、1978
				1	26	Ac	珪質泥岩	UF1	DIII-7住居址No.1のP23埋土上部	
				1	22	Ac	硬質泥岩、珪質細粒凝灰岩、流紋岩	UF1, 石鏃1	DIII-7住居址No.2の小ピット	
				1	34	Ac	珪質泥岩、珪質細粒凝灰岩	UF8	DIII-8住居址P2埋土上部	
				1	75	Ac	珪質泥岩、珪質細粒凝灰岩、玉髄	UF3	EII-2住居址のP5内、床面レベルからピット底面まで集中(No.1)	
				1	8	Ac	不明	剥片8点	EII-2住居址P6に接する床面直上にNo.2	
				1	26	Ac	珪質泥岩、珪質細粒凝灰岩、珪質凝灰岩質泥岩	剥片26	EII-4住居址の壁柱穴P3の南東に接する小ピット(径17m、深さ7m)にNo.1	
				1	19	Ac	鉄石英	剥片19	EII-4住居址の壁柱穴P4の埋土上から床面にNo.2	
				1	18	Ac	硬質泥岩	剥片18	EII-4住居址の壁柱穴P5の南西に接する浅皿状ピットにNo.3	
				1	43	Ac	珪質泥岩、珪質細粒凝灰岩、珪質凝灰岩質泥岩	SS3、UF9、鋸齒縁1	EII-8住居址北西壁際寄り床面	
				1	51	Ac	硬質泥岩、珪質凝灰岩質泥岩	UF5	EII-15住居址南西壁際寄り床面	
				1	65	Ac	硬質泥岩	UF5	EIII-8住居址の壁柱穴P3の埋土と床面	
				1	11	Ac	硬質泥岩	UF2、RF2	FII-7住居址ピット群の中央にあるP1(径30cm、深さ30cm)底面	
				1	33	Ac	珪質凝灰質泥岩	UF9、SS2	GII-2住居址北西壁際寄りの小ピット(径12m、深さ7m)中にNo.1	
				1	17	Ac	珪質泥岩、珪質細粒凝灰岩	UF3	GII-2住居址西壁沿いの周溝と壁の間No.2	
				1	数個	Ac	珪質泥岩、珪質細粒凝灰岩	UF3、ES1	GII-2住居址西壁沿いの周溝と壁の間No.3	
				1	数個	Ac	不明	剥片	GII-5住居址壁際柱穴P9に接する北床上	
				1	20	Ac	珪質泥岩、硬質泥岩	剥片	GII-10住居址炉近く北東の床面	
1	9	Ac		硬質凝灰質泥岩、珪質泥岩	UF9、SS2	GII-19住居址壁柱穴に接する東側床上				
1	46	Ac	硬質凝灰質泥岩、珪質泥岩	剥片	HII-3住居址南壁に接する小ピット(径20cm、深さ14cm)中					
柳上	0	不明	Ac	不明	不明	N34②住居東壁溝付近にまともる	岩手県埋蔵文化財センター 1995			
	0	16	Ac	不明	剥片16	E36住居南側の壁溝内にまともる				
高畑	1	90	Ac	珪質頁岩	石片約90点(FL23点が接合①、FL25点が接合②、FL6点が接合③。石核は残らず、住居外で割った後に主要な剥片を貯蔵)	FG50住居跡の①ピット埋土中層の剥片貯蔵。9割が同質の石材	岩手県教育委員1980			
水上	1	14	Ac	珪質泥岩・チャート質淡緑石・凝灰岩	2~3cmの小型剥片。接合せず。3母岩。	IJ41住の北壁寄り埋土最下位から	岩手県埋蔵文化財センター 1986			
山形	高瀬山	1	1204	Aa	珪質頁岩	1204点(BL27, 稜付BL18, BL-CO27, 打面再生FL51, FL150, CO68, A未2, 石鏃1, PO未1, DR1, SC1, ES1, 他SC3)	石器一括遺構SX241	山形県埋蔵文化財センター 2012		
中期末~後期初頭	山梨	上中丸	1	9	Dd	黒曜石、石斧は未記載	注口土器に納めた石斧8と原石1	H19年度調査区、居住域外。8点中7点に使用痕あり	山梨文化財研究所編2012	

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
中期末～後期初頭		青森	笹子(2)	1	208	Aa	珪質頁岩	208点(接合31組59点)	剥片集積。中心の30～40cmの密度が高い	青森県埋蔵文化財調査センター 2010	
中期末?		秋田	盤巻台	1	66	G	硬質頁岩	浅い土坑内から剥片と石核。2母岩、接合24点	SQ348石器廃棄遺構	秋田県埋蔵文化財センター 2001	
末葉	縄文時代中期	青森	水上(2)	1	70	Ac	珪質頁岩	剥片70(うち12組35点が接合) 二次加工や微小剥離痕のあるものを含む	S11052住居内のビット1の埋土上部に密集	青森県埋蔵文化財調査センター 2013	
				1	8	Aa	珪質頁岩	剥片8、5母岩、接合なし	SX05		
			新田	1	32	Aa	珪質頁岩	FL3, UF29、母岩5、接合なし	SX07: 18×14cm		
				1	28	Ac	珪質頁岩	集積1(28点: FL2, MF25, RF1)、7母岩	第11号竪穴住居跡の新炉前庭部壁際		青森県埋蔵文化財調査センター 2006
				1	25	Ac	珪質頁岩	集積2(25点: FL4, UF21, RF1, 両極剥片1)、8母岩、接合2組	第11号竪穴住居跡の新炉前庭部壁際		
中期末～後期初頭			山田(2)	1	不明	頁岩	点数不明	第8号住居跡床面南東隅	青森県埋蔵文化財調査センター 2009		
中期末～後期前葉		長野	長峯(別田沢)	1	15	Ac	黒曜石	住居内に原石15を貯蔵	(PL37-4では、SB04の大きな礫の下に黒曜石の集積が写る)	長野県埋蔵文化財センター 2005	
末葉?		青森	槻ノ木	1	29	Da	珪質頁岩	打製石斧29	石器集積跡、同一母岩の可能性のあるものが4組各2点。斜めに立てかけたような状態。	青森県埋蔵文化財調査センター 1983	
末葉	縄文時代中期	福島	長野	安庭	1	200	Ad	チャート、黒曜石	長耳土器の底に近い部分に、大小200小近いチャート片(卵大～指頭大)、黒曜石片2・3片	4個の自然石が立ち並び、土器の下に一枚の石を敷き、さらに蓋として石をかぶせてあった。	百瀬新治1975
			石神平	1	19	Ab	黒褐色の頁岩	19点(うち1点に二次加工) 2点が折面接合	竪穴住居跡の柱穴6の埋土上部西側から一括出土	金山町教育委員会1996	
			岩淵	1	約20	Ac	頁岩、黒曜石	1号住居跡の西側周溝内から黒曜石製剥片1点と頁岩製剥片約20点が出土		福島大学考古学研究会1976	
			馬見塚	1	15	Ac	不明	2号住居跡P1・2埋土上部(ともに主柱穴)から剥片15点が集中(2～3母岩)		相馬市教育委員会1982	
			井出上ノ原	1	12	Bc	頁岩	異形石器(サメ歯形)12点	H13・14年(未報告)発掘の住居跡床面から、袋入りか?	楡葉町教育委員会 2005	
			馬場前	2	6+13	Ac	チャート	剥片6+13	59号住居跡床面、周壁際、P10(6点)とP11(13点)		
				1	35	Ac	頁岩1+鉄石英14+チャート6+流紋岩13+アブライト1	石鏝未成品1+RF6+UF5, FL18+楔4, 磨石1	86号住居跡床面、主柱穴P1の東隣、床面から1～2m遊離、袋状の入れ物に入っていたと推定。珪質同一母岩・接合なし		
				3	32	Ac	流紋岩18+鉄石英14	RF4, UF5, FL17, 楔5	113号住居跡床面、東南壁際(6点)、南西壁際、西壁際の3か所。流紋岩18(3母岩・接含有)+鉄石英14		福島県文化振興事業団2003
				1	11	Ac	チャート4+珪質頁岩3+鉄石英3+アブライト1	SS1, RF1, UF3, FL5, 磨石1	115号住居跡床面、南西壁際の周溝際(11点)。		
			1	7	Ac	チャート	UF1, FL6	142号住居跡床面、周壁際P1内、チャート7点のうち5点が同一母岩			
			1	5	Bc	チャート2+珪質凝灰岩1+玉髓1	異形石器(サメ歯形)4、FL1	156号住居跡床面、周壁際P11内			
			上ノ台A	1	11	Ac		剥片11点が一括出土	8号住居跡P12(主柱穴)から		
				1	8	Ac	頁岩	剥片8点が一括出土	15号住居跡南壁の床面から		
				1	41	Ac	石英脈岩	剥片41点が一括出土	47号住居跡P6埋土中(周溝にある柱穴)から		福島県文化センター 1990
			1	31	Ac	頁岩	剥片31点(縦長剥片を含む)が集中	69号住居跡P8埋土上面およびその付近の床面から			
			南和台	1	9	Ac	不明	剥片9点が一括出土	1号住居跡周溝内から		飯野町教育委員会1977
			和台	1	16	Ac	珪質頁岩	剥片16点、平均長5.51cm	18号住居跡P1検出面、土器の一括廃棄の低位。埋納の可能性。5cm前後の剥片のみ。		飯野町教育委員会2003
			愛宕原	1	21	Ac	不明	剥片21点が密集	1号住居跡P12(北西壁際)にSK68、径7.5×深さ12cm内の38×23cmに集積。左右側が立ち並び。袋入りか?		福島市教育委員会1989
			弓手原A	1	240	Ab	頁岩	剥片240点(縦長剥片が多い)	剥片240点(縦長剥片が多い)		福島県文化センター 1996
			中平	1	多量	Ac	頁岩	縦長剥片が一括出土(接合2例、5点)、13点	4号住居跡P1(主柱穴)から		福島県文化センター 1989
末葉	縄文中期	青森	田ノ上	1	26	Ac	碧玉	剥片26点	第2号住居跡ビット19内から	青森県教育委員会 1981	
				1	4	la	硬質砂岩(石皿)と砂岩	直径52cmの石皿1点が磨石3点を覆う	磨り石は重なるように横位に立つ		

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
不明	縄文時代後期	愛媛	馬島亀ヶ浦	1	不明	Ea	サヌカイト	大型剥片や石核		愛媛県埋蔵文化財調査センター 1999	
		茨城	冬木A貝塚	1	18	Fd		貝輪18	貝輪を土器に収蔵	茨城県教育財団1981	
			南高野貝塚	1	12	F		貝輪12		今橋1989	
		岡山	津島岡大15次	1	5	E	サヌカイト	石核5点		岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2004	
縄文時代後期～晩期		岩手	尿前Ⅱ	1	45	Aa	珪質頁岩	FL45。3～4母岩	VB9d剥片集中区、Ⅲ層下部、0.6×0.45mの範囲	岩手県埋蔵文化財センター 1999	
不明	縄文時代後期？		下村B	1	多量	Ab	不明	石鏃4、SC2、剥片21（図化資料の数）	Db09-1土坑（102×76cm、深さ16cm）埋土（床面に焼土）	岩手県埋蔵文化財センター 1983	
		岐阜	勝更白山神社周辺	1	5	Da	安山岩、砂岩	打製石斧5	12V石製土掘具出土状況。中央部で積み重なって三方に分かれる。2点は未成品、完成品は刃部を中央に向ける	岐阜県文化財保護センター 1995	
中期～晩期		京都	石田	1	10	Aa	サヌカイト	剥片（長さ平均10.8cm、幅7.4cm、厚さ2.5cm、重量193g）	D9区のⅢ層下部（16.5×21.0cm）	京都府埋蔵文化財調査研究センター2008	
不明	縄文時代後期？	香川	国分寺六つ目	1	112	Aa	サヌカイト	石匙1を含む112点（金山産）。49点、18組の接合。両極あり	4区サヌカイト集積遺構、掘り込みなし	香川県教育委員会他 1999	
			川津六反地	1	24	Ea	サヌカイト	石器集積1	金山産24点（板状石核の素材となり得る剥片20点、SC2点、石核2点）	香川県埋蔵文化財調査センター 2001	
		青森	小牧野	1	122	Aa	珪質頁岩	剥片、接合4組	剥片埋納遺構（SX-07）	青森市教育委員会2002	
不明	縄文時代後期	京都	桑飼下		1	7	Da	主に粘板岩	打製石斧7、刃先を4点が北に、3点が南に向ける	Ⅲ45区、炉跡B1群の南側に少し隔たって位置	平安博物館・舞鶴市教育委員会1975
					1	3	Da	主に粘板岩	打製石斧3、刃先を2点が西に、1点が東に向ける	Ⅲ73区、炉跡B2群の第23号炉跡の北東に位置	
					1	6	Da	主に粘板岩	打製石斧6、刃先を5点が北に、1点が東に向ける	Ⅲ51区、炉跡D群に隣接、第28号炉跡の西に位置	
					1	4	Da	主に粘板岩	打製石斧4、刃先を1点が北に、2点が北東に、1点が南西に向ける	Ⅲ32区、炉跡C3群の中、第46号炉跡の東に位置	
		広島	洗谷貝塚	2	34	Eb	サヌカイト	石器集積土坑2か所（34枚の大型板状安山岩）		福山市教育委員会他 1976	
		鹿児島	川久保C地点	1	5	Da	ホルンフェルス	SC2、打製石斧3、土器片1、被熱礫1	70×35cmの範囲。おそろく石斧3点とSC1点と土器・礫各1	鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2019	
	秋田	漆下	2	173	Ab	頁岩	石核1点、剥片109点、チップ63点（接合資料あり7点が図示・同一母岩）	SK1172剥片埋納遺構（0.32×0.28×深さ0.33m）。もう1基未記載	秋田県埋蔵文化財センター 2011		
後期～晩期		熊本	飛田遺跡群	1	5	Db	蛇紋岩、凝灰岩、流紋岩	磨製石斧1・打製石斧4（打製のうち2点が未成品、3点には使用による刃毀れ有）	SX122（70×60×深さ10cmの土坑）	熊本県教育委員会 2015	
		大阪	粟生間谷	0	13	製作址	サヌカイト	13点（ナイフ1点が含まれ、集中地点と報告）	土坑70（2×0.8×0.2m）：サヌカイト埋納遺構	大阪府文化財センター 2003	
		福岡	三苦		1	5	Eb	黒曜石	腰岳産の石核素材が5点	A区SK-0001土坑(1.2×0.95m埋土上面)内に埋納遺構。上部削平。	吉留秀敏2004、福岡市教育委員会 2003
					1	1	Eb	黒曜石	腰岳産1点	A区SK-0003土坑(0.95×0.8m埋土上面)内に埋納遺構。上部削平。	
不明	縄文時代後期	青森	小田内沼(1)	1	12	D	不明	磨製石斧7・石筵1・削搔器4		三沢市教育委員会 1992	
		静岡	富士石	1	3	Da	硬質頁岩、頁岩、中粒砂岩	打製石斧3	石斧埋納遺構18×15m、コの字状に配置	静岡県埋蔵文化財センター 2012	
		石川	御経塚	1	7	Db	未記載	打製石斧7点（未使用・完形）、長軸を東西に向けて	第6号住居跡の北西0.5mに、直径40cmの浅い掘り込み	野々市町教育委員会1983	
		千葉	加曾利貝塚		1	6	F	未記載	磨製石斧1・貝輪5		杉原荘介編1976『加曾利貝塚』
					2	52	Fd		貝輪33・19		八幡1928、船橋市教育委員会1988・2003
		長崎	宮下貝塚	1	10	Db	多様	磨製・打製石斧10点が刃部の向きを揃えて	貝層中に50×40×深10cm、人頭大の板状礫を上に向けて	富江町教育委員会 1998	
初頭～前葉	岩手	岩手	大日向Ⅱ	1	73	Ac	チャート	剥片73点、接合4	SA20住居跡P3から	岩手県埋蔵文化財センター 1998	
			馬立Ⅰ	0	77	製作址	チャート、細砂質凝灰岩	77点（両極石器18点を含む）が散在	EIH7住居炉東側2×0.8mに	岩手県埋蔵文化財センター 1988	
				0	40	製作址	チャート、流紋岩質極細粒凝灰岩	40点（両極石器28点を含む）	GII2-1住居内に		
初頭	縄文後期	岩手	大向上平	1	78	la	硬玉	硬玉製大珠2・貝製平玉2、貝製品1、アマオブネ貝製の玉73点以上	1号埋設土器（ピット内に正位で埋置）内の深鉢片3点の下から	岩手県埋蔵文化財センター 2000	
			板橋Ⅱ	1	60	Ab	頁岩	同一母岩の石核・剥片60点。9点が接合資料に含まれる。	13号住居の柱穴P1に接するP2から	岩手県埋蔵文化財センター 2021	

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典		
初頭～前葉	縄文後期	静岡	見高段間	1	76	Ea	黒曜石	石核2と剥片74	70×25cmの範囲に重なるように	河津町教育委員会1980		
初頭	縄文後期	長野	立石	1	18	Ea	黒曜石	黒曜石18個(合計1226g)	称名寺式の土器片を含む	茅野市教育委員会1994)		
後期前葉～晩期末	前葉	岩手	君成田IV	1	28	Ab	不明	大型剥片が多い	I54区から剥片の詰まった穴	岩手県埋蔵文化財センター1983		
1				73	Ac	チャート	ES1点を含み73点	F49住居跡壁際。				
馬立I			1	13	Ac	玉髓・チャート・凝灰質泥岩	剥片	D I 6住居跡群	岩手県埋蔵文化財センター1988			
鶴飼			1	3	Ib	不明	礫3点	R2001石器埋納遺構62×47×深さ14cm	岩手県埋蔵文化財センター2013			
安横6区			1	7	Ca	珪質頁岩(石鉄)、珪質頁岩(剥片)	石鉄6点、剥片1点	石鉄を放射状に円形に並べた埋設遺構(4cmの円を描く)。4号石囲炉の東側2.1m。中島に立地。魚や鳥の豊漁(猟)を祈願と推定。	ふるさと歴史資料館2000			
			1	1	Ia	不明	磨石1点を8個の礫が囲む	4号屋外炉の65cm北、焼土の南端。堅果類の豊作を祈願したと推定。				
馬立II			1	不明	Ba	チャート	DR1+楔12(15点図示)	Allij4住居土中位から一括出土	岩手県埋蔵文化財センター1988			
新山権現社			1	不明	G	不明	石器製作時の剥片が集中する場所が幾つか	廃棄された焼土と共に	岩手県埋蔵文化財センター1993			
前葉～中葉中心			縄文時代後期	秋田	高瀬館跡	1	6	Da	未記載	磨製石斧6点が一括出土。土坑に伴うものではない。全て刃先が欠損し、使用した可能性が高い。	SK135のプラン確認面のやや上、北東隅から。4点が刃部を北に向け、2点が東に向けている。流れ込みと解釈された。	秋田県埋蔵文化財センター1990
					新潟	元屋敷	1	3	Da	輝緑岩	大型の磨製石斧3本、未使用品	SK6524、敷石上に置かれた
	青森	小牧野		1	123	Ab	珪質頁岩	FL66, RF8, UF9, 不定形1, CH35	剥片埋納遺構(44×深12cm)	青森市教育委員会2006		
				1	59	Ac	珪質頁岩、玉髓質珪質頁岩	Uフレイク1点、楔形石器15点、フレイク43点(両榎打法)	第26号竪穴住居跡(集積1)床面・複数の母岩・接合9組	青森県埋蔵文化財調査センター2001		
		安田(2)		1	32	Ac	珪質頁岩、玉髓質珪質頁岩	スクレイパー3点、Rフレイク2点、楔形石器1点、フレイク26点、珪質頁岩、接合7例(2つの集中間の接合1例)	第26号竪穴住居跡(集積2)床面・複数の母岩・接合7組			
		田ノ上		1	26	Ac	碧玉	剥片	第2号竪穴住居跡ビット19ビット覆土	青森県教育委員会1981		
	笹子	1		3	Dd	緑色凝灰岩	定角式磨製石斧3点(長さ5.9~8.4)が壺形土器に入る	遺構なし	八戸市教育委員会編1988			
	東京	桜塚		1	4	Dd	蛇紋岩3+碧玉1	定角式磨製石斧4点。いずれも完形。	堀之内式の注口土器内に	笹津備洋1956		
	北海道	西昭和2		1	109	Ca	黒曜石	石槍74点、剥片2、周辺から石槍33点(十勝三俣産黒曜石の製作址)	径20cmの範囲	北海道埋蔵文化財センター1993		
	神奈川	北原No.9		1	32	Ad	黒曜石	石鉄未成品・欠損品32、RF2、FL51、CH6053(FL:霧ヶ峰3、神津島2)	J1号石鉄未成品出土器内(横倒し状態)	神奈川県立埋蔵文化財センター1994		
1			17	Ed	黒曜石	原材・残核17を正位の土器内収蔵	J1埋設土器内					
前半	前葉	青森	一ノ渡	1	2	Ia	ヒスイ	大珠2	組石、集石遺構の検出面から。遺構外。	青森県埋蔵文化財調査センター1984		
中葉	岩手	大日向II	1	20	Ac	緑色凝灰岩	20点。接合2。	SA56住居跡P2から	岩手県埋蔵文化財センター1998			
			馬場野I	1	3	Ac	珪質泥岩・硬質凝灰岩質泥岩	SC3点が重なって出土	CVII-03住居址西壁寄りPo9と10の間の床	岩手県埋蔵文化財センター1983		
			相ノ沢	1	3	Da	凝灰岩	完形磨製石斧3(ほぼ完形)。	軸線は北東-南西。	岩手県埋蔵文化財センター2000		
	宮城	王ノ壇	1	5	Ea	頁岩	石核4点+剥片1点	石核集積遺構1(80×60×3m)	仙台市教育委員会2000			
	青森	丹後平	1	8	Ac	珪質頁岩	石鉄未成品と思われるRF3点を含むFL類	第10号住居跡北西壁際の床面に重なった状態	八戸市教育委員会編1988			
			1	8	Ac	珪質頁岩	剥片8点が重なった状態。1母岩・接合2組	第10号竪穴住居跡北西壁際床面、写真14(2か所に分かれている)	八戸市教育委員会1988			
中葉～後葉	後葉	福島	北平	1	15	Ab	凝灰質頁岩	剥片15点(同一母岩)が出土。5cm前後で大半に二次加工や微小剥離痕。	9号土坑の埋土1から	福島県文化センター1992		
中葉～後葉	縄文時代後期	福島	上川向	1	12	Ac	頁岩	石核1点と剥片11点が集中	1号住居跡の東壁際の床面の僅かに達している部分から	福島市振興公社文化財調査室1997		
				岩手	大日向II	1	40	Ac	粘板岩	40点、楔多い	H I 8a住居跡壁際床面	岩手県埋蔵文化財センター1986
		1	17	G	チャート	17点	A調査区捨場Ⅲ層から					
後半	後葉	鹿児島	町田堀	1	13	Da	ホルンフェルス、粘板岩	打製石斧13点	1号石斧集積。掘り込みあり深さ8m、東西軸で積み重なる	鹿児島県埋蔵文化財調査センター2016		

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典
後半	縄文後期	鹿児島	町田堀	1	3	Db	ホルンフェルス、頁岩	打製石斧3点	2号石斧集積、掘り込みなし、東西軸	鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2017
後葉		秋田	橋場岱D	1	205	Ab	珪質頁岩、玉髄質の珪質頁岩、頁岩	205点の剥片。総重量2365g。特に0.3×0.17mの楕円形、厚さ7cmの範囲に密集。17点が接合に含まれる。5母岩	SU03石器剥片集塊 (0.4×0.3m)	北秋田市教育委員会史2006
後期後葉～晩期前葉	青森	丹後谷地	鞍越	1	12	Ac	珪質頁岩	剥片	SI-01 床面、住居跡壁際	川内町教育委員会1993
後葉			未記載	剥片82点と剥片をアスファルトで固めたもの	第46号竪穴住居跡P50 覆土	八戸市教育委員会1986				
後葉以前	福島	日向南	1	80	Ac	珪質頁岩	母岩複数・接合2組(楔を含む両極剥離)。小型原石	第56号竪穴住居跡ビット覆土		
後葉			1	14	Ac	頁岩	剥片14点が集中(4点図化、いずれも5cm)。80cm北側に台石あり。	50号住居跡西壁際床面の小さな窪み(直径20cm、深さ3cm)に	福島県文化センター 1987	
後半	長崎	午庚	1	6	Eb	黒曜石	腰岳産黒曜石6個	SX001集積遺構、土坑底面から浮いた状態	伊万里市教育委員会2000	
			1	30	Eb	黒曜石	腰岳産黒曜石30個	SX002集積遺構		
		福岡	元岡・桑原	1	8	Ea	黒曜石	原石8点	28次調査区から約3mの範囲。元々埋納遺構があったものが、後世に崩落した	福岡市教育委員会 2006
後期後半から晩期	新潟	元屋敷	1	5	Db	輝緑岩	磨製石斧5。大中小のサイズ。未使用品	SK1402、土坑内に埋納	朝日村教育委員会2002	
			1	2	Da	輝緑岩	磨製石斧2点が並列	SK1404、明確な掘り込みなし		
後期後葉～晩期初葉	北海道	稀府川	1	78	Aa	珪質頁岩	UF2、FL76、同一母岩、接合7組、18点。	L-89-d区、30×40×9cm	北海道埋蔵文化財センター 1990	
			1	27	Aa	メノウ1・流紋岩1以外珪質頁岩	SC3、UF2、FL22。周囲の剥片とも接合あり。	O-82-a区、径15cm、厚さ5cm		
不明	縄文時代晩期	岡山	百間川沢田遺跡高縄手B地区	1	6	Bb	サヌカイト	打製石鏃1、石核4、剥片1の6点。	壁状の安山岩が大形石器とともに土壌に集積	岡山県古代吉備文化財センター 1993
				1	4	Bb	サヌカイト	石包丁状石器1、削器1、石核1、剥片1	石器集積土坑160×47×14cmの土坑	
		香川	平池南	1	5	Ba	サヌカイト、砂岩	石器集積1	打製石斧3と叩石2、剥片1。袋に入りと推定	香川県埋蔵文化財調査センター 1996
				1	3	Da	頁岩、硬砂岩、蛇紋岩	完形磨製石斧3点(刃毀れ、研ぎ直し有)	明確なキャッチとは言えない。やや離れる	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010
		鹿児島	上野原	1	3	Da	頁岩2+安山岩1	扁平打製石斧3		鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003
				1	4	Da	安山岩	打製石斧4点の埋納の外側に2点の石斧(破損品・完形打製)	石斧4点が斜めに軸を合わせて出土	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010
		長野	御社宮司	11		Ea	黒曜石	原材26・7・4・11・14	E-14区、掘り込みなし。石斧集積	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006
				1	4	I	粘板岩	4本の石刀状の石器と自然石1個を立てて、60×45cm、深さ17cmの土坑に埋置した。	掘形内から粘板岩製剥片13点が出土	福島県文化センター 1987
		北海道	オレイカ2	1	2	Ec	黒曜石	白滝赤石山産の角柱状の黒曜石原石(30cmを超える)。	同軸で並置	北海道埋蔵文化財センター 2003
				1	2	Db	ホルンフェルス	石斧埋納。石斧が全面に丁寧な研磨があり、刃部には刃毀れがある	1号土坑の埋土1の上面に石斧1点を埋納。	宮崎県埋蔵文化財センター 2002
後期末～晩期?	福島	村下 A地点	1	195	Ab	ほとんどがチャート	礫集中出土1(直径25cm、深さ15cm) : 剥片195点が集中		南郷村教育委員会1991	
			1	46	Ab	ほとんどがチャート	礫集中出土2(直径17cm、深さ7cm) : 剥片46点が集中			
晩期末～続	北海道	滝里安井	0		副葬品	黒曜石	石鏃117点、石斧5など	土坑墓P-15北壁際に集中		
1			12	Da	泥岩・片岩	石斧3点と石斧未成品9点。	II-1層、軸を合わせて30×20cmに集積	北海道埋蔵文化財センター 1998		
晩期～続縄文	福島	御経塚	1	11	Ea	黒曜石	両面・半両面加工石器(ナイフ)7点を含む	II-1層の石器集中、径25cm		
1			1	F		貝輪が合計1275枚	6トレンチから139枚が集積、7トレンチでも集積を確認	秋田県教育委員会 1966		
前半	縄文時代晩期	秋田	柏子所貝塚	1		F		晩期前半	野々市町教育委員会1983	
		石川	御経塚	1	1	Ia	火山礫凝灰岩	御物石器を自然石8個で円形に囲み埋納		
前葉～後半	岩手	大日向II	1	31	G	珪質泥岩	31点、接合2	SC28焼土遺構から	岩手県埋蔵文化財センター 1998	
			1	14	Ab	硬質頁岩	剥片14	土坑No.2の1層中	滝沢村教育委員会1993	

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典	
中期	縄文晩期	福島	北向	1	28	Ac	珪質頁岩	剥片28点が集中(23号住居出土の石核と同一母岩)	4号住居跡P6堆積土中に	福島県文化センター 1990	
			岩下B	1	7	Ac	頁岩	剥片7点がまとまる	1号住居跡北東壁際の床面に	福島県文化センター 1985	
		秋田	秋大農場南	1	10	Dd	凝灰岩	磨製石斧10が土器内から	6号土器埋設遺構	秋田市教育委員会 1992	
晩期後半～弥生		奈良	玉手	1	137	Aa	サヌカイト	サヌカイト片が137点。砕片を含まず。9母岩、接合少	長径33cm、短径28cm、深さ19cm。土坑の半分が埋まったのちに石器が集積	御所市教育委員会 2017	
後半	不明	北海道	聖山	1	16	Ab	メノウ	剥片(2点のSS含む)、3点 が同一母岩うち2点が接合		東北大学文学部考古学研究会 1979	
				1	18	Eb	硬質頁岩	原石9+石核7+RF2	径30cmの土坑内		
後葉	不明		ママチ	1	6	Ea	黒曜石	棒状の原石6(白滝産)	E-16区、遺構外	北海道埋蔵文化財センター 1987	
				1	275	Aa	黒曜石	剥片石器275	B-17区、20x10cm。		
				-	38	Ab土坑への副葬か	黒曜石	剥片・砕片38点。接合なし	土坑BP-53上面から一括出土。		
				1	123	Ca	黒曜石、溶結凝灰岩	石鏃123、矢柄研磨器2、剥片石器9、棒状原石1、土器片7	D-23区、掘り込みなし		
				1	13	Da、副葬品?	溶結凝灰岩、黒曜石	磨製石斧13、矢柄研磨器1、ペンガラ付着の黒曜石製剥片石器1、土器片。周囲に石斧が数点散乱	D-22区、掘り込みなし		
				-	106	Ab、副葬品?	黒曜石	剥片105、棒状原石1	埋納土坑AP-58		
				-	2	Db、副葬品?	かんらん岩	磨製石斧2本が並ぶ	埋納土坑AP-65、土坑の側壁から		
				-	8	Ad、埋設土器?	黒曜石	剥片8点	埋納土坑AP-326、壺が口縁部を下にまとまって		
末葉	不明	鹿児島	鳴神	1	22	D	不明	打製石斧6点・磨製石斧16点(丸のみ2点含む)		大隈町教育委員会 1996	
			大坂	ミヤケ北	1	331	Ab?製作址	サヌカイト、頁岩	多数の剥片301点、石核17点、UF11点、RF2、接合石核3点	サヌカイト集中遺構105(1.8～2mの範囲)	大阪府教育委員会 2012
		長原		1	91	Ab	サヌカイト	石核3・剥片86、RF2	ビット148(径26cm、深さ27cm、二段掘り込みの上段のみ)。墓域の中にある。	大阪市文化財協会1983	
		栄町5		1	5	Ad	黒曜石	壺内に白滝産の大型剥片5点	群土坑墓からは石斧集積埋納がある	北海道埋蔵文化財センター 1990	
		北海道	東山5	1	43	Ca	黒曜石	石鏃43点(多くは二等辺三角形、黒曜石製、細長い袋状の入れ物に入っていた可能性)	石鏃だけの集中、径20cm	北海道埋蔵文化財センター 1982	
1	11			Ca	黒曜石	石鏃11点	石鏃の集中				
晩期後葉～続縄文中葉				1	20	Ba	黒曜石	大型スクレイパーの下に、石鏃・剥片・スクレイパーなど20点以上。	径15cm		
後期～前期		岡山	彦崎貝塚	2	3+1	Ea	サヌカイト	SC1・楔1・板状FL2	動物遺存体埋納土器	岡山市教育委員会2007	
中期末以降	縄文時代	岩手	清田台	1	4	Da	蛇紋岩	磨製石斧4	石斧埋納遺構(磨製石斧4)完形、1点が身部摩滅。	岩手県埋蔵文化財センター 2003	
前期末以降			埴山牧場 I B	0	11	G	頁岩	11点中接合4、母岩1。石鏃を含む	RF04焼土遺構の焼土中	岩手県埋蔵文化財センター 2000	
前期～後期			塚野 I	1	209	Aa	泥質凝灰岩製	剥片、うち接合3	ID石器集中区	岩手県埋蔵文化財センター 1993	
縄文時代				1	不明	Aa	泥質凝灰岩	剥片(第8図)	6J区、埋没谷かわ1m離れる		
晩期前半より古い					川内	1	57	Ac	珪質泥岩、凝灰質珪質泥岩、細粒凝灰質硬砂岩	剥片57、石鏃委2、ES4を含む。接合3組	C10住居跡南西壁寄りのフレイクビット、折り重なった状態
早期～後期		佐賀	岸田南	1	34	Aa	無斑晶質安山岩	FL34	剥片集積5X102(25x20x深15cm)掘り込みなし	佐賀県教育委員会 2002	
早期～前期?		青森	川原平 E地区	1	2	Ba	珪質頁岩	石鏃2点が平行に重なる	写真3	青森県埋蔵文化財調査センター-2016	
縄文時代?	不明	岩手	親久保 I	1	27	Aa	チャート	剥片27点。質が悪い	調査区西側の沢から一括出土	岩手県埋蔵文化財センター 1987	
			鹿儿島	市ノ原	1	99	Ab	サヌカイト	土坑から剥片99点	サヌカイト集積	鹿儿島県立埋蔵文化財センター-2006
			滋賀	塚之越	1		Aa	サヌカイト	サヌカイト剥片集積遺構		守山市教育委員会 2014
縄文時代?		秋田	上熊野沢	1	不明	Aa	メノウ	剥片が1か所からまとまって出土。剥片貯蔵の可能性		秋田県埋蔵文化財センター 1991	
縄文時代	不明	岩手	大日向 II	1	3	B		磨製石斧2、磨砕石1		岩手県埋蔵文化財センター 1998	
			早坂平	1	8	Da	珪質泥岩、閃緑岩、ホルンフェルス、旗レイ岩、砂岩	磨製石斧8(2点が製品、6点が未製品)	磨製石斧集中部	岩手県埋蔵文化財センター 2004	
		香川	園分寺六ツ目	1	約60	Aa	サヌカイト	剥片集積		香川県教育委員会 1990	
			駅迎堂	1		E	黒曜石	黒曜石原石	貯蔵された黒曜石原石	山梨県教育委員会1986-1987	
			山梨	東原	1	3	Eb	黒曜石	黒曜石原石3(塊状のズリ石)	巨礫の間に原石を埋納した第5号土坑	山梨県埋蔵文化財センター 1998

時期	時代	都道府県	遺跡	件数	点数	性格	石材	内容	位置等	出典
縄文時代	鹿児島		飯盛ヶ岡	2	5+4	D		石斧3+SC2 (5点が立った横位で状態)、磨石4 (一部重なり密集)	石器集積2 (石斧の形態は晩期、遺跡は早期の遺構が多い)	鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993
			三本松	1				石器集積		西之表市教育委員会 2013
			堂園 B地点	1	4	Aa	未記載		A-6区、II d層、石器集積1	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008
	秋田		上野 II	1				石器集積1		大仙市教育委員会 2015
			地蔵岱	1	4	Ab	頁岩	接合する縦長剥片4点が出土	SK2225 (0.43×0.4m、深さ0.1m) の底面よりやや上位から	秋田県埋蔵文化財センター 2008
	神奈川		川尻	1		I		磨石	B2Uから一括出土 (キャッシュ)	かながわ考古学財団 2000
	静岡		西山	2	2+6	Da	頁岩	1号石斧集積遺構：打製2点、2号石斧集積遺構：打製5、局部磨製1	縄文時代早期ではなく、縄文の新しい時期	静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006
	石川		田上南	1		A		石器集積		金沢市埋蔵文化財センター 2009
	大阪		千里丘遺跡群第2地点	1	137	Aa	サヌカイト	石器集積1	137点 (チップ除く)、接合資料9組を含む	大阪府教育委員会 2006
			西大井	2		A	サヌカイト	サヌカイト石器集積2		大阪府文化財調査研究センター 1995
	長崎		西佐竹	1	4	D		石斧4本を一括埋納		諫早市教育委員会
			駒形	1	3	Ea	黒曜石	黒曜石原石3点	第107号住居跡外の南	茅野市教育委員会 2016
	福岡		上清水 3区	1		A		石器集積		北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1995
	縄文時代?	長野		新道	1	?	A, C	黒曜石	未成品の石鏃数点を含む黒曜石剥片・原石のひとかたまり	1号住居跡の北壁直下
九兵衛尾根				1	1	Ec	黒曜石	握り拳大の黒曜石原石	10号住居の柱穴	未報告

「性格」欄 大分類 A: 剥片の集積、B: 各種道具の集積、C: 狩猟具の集積、D: 石斧の集積、E: 原石・石核の集積
F: 石器以外の集積、G: 廃棄物の集積、I: その他の器種の集積

小分類 a: 土坑なし・b: 土坑あり・c: 住居内・d: 土器内

